月刊ナイトバグ　かぼちゃ提灯型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2009年11月号
「ようこそ地底へリグル・ナイトバグ」
酒は飲んでも飲まれるなという御話　Step
連載最終話
ひとまずの終着、そして明日へ
夏樹 真 / 尾巻ニゲル
TRICK OR TREAT
...OR TOUKOU ?
ハロウィン特集

きせかえリグル

パンプキン・クイーン
ハロウィンに合わせたコスプレ衣装。
着て行く場所は選びましょう。

リグル（素体）
完全無欠のお姫様候補生

ルージュのドレス
超フェミニンなドレスです。
しかしフェミニンとかイブニング
ドレスなどの単語の意味はあまり
理解していない。

松○女子高等学校
アニメが大好評のうち終了した
某作品を忠実に再現。あなたも
今日からふみちゃん

小物。好みにあわせてつけてね

月刊ナイトバグ　2009年11月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

『 日の照りながら、雨の降る。 』　Jade.

薄い雨雲薄い青空薄くかかる天気雨。追い付いて傘へ、立ち止り傘を。僅かに触れる触角。秋雨の生んだ一期一会？
ハロウィンに人間に仕掛ける悪戯の相談？ ふとした拍子にぱっと、生まれては消える。名もない様な小さな気持ちを怖
がらず、大切にしたかった。精一杯私の淡い感情を込めた絵を見た誰かに、何か淡い感情が生みだせた
なら。小雨の中、陸橋の階段の垂直部分の僅かな反り返りに、ウスバツバメガが貼り付いて雨露を凌いでました。

『 リグルの家に遊びに行ったら着替え中だった 』　黒ストスキー

ルーミア「へー、リグルもそんな可愛いドレスとか持ってたんだー(ニヤニヤ)」みたいな感じでひとつ

みんなみんな白く
みんなみんな暗く
溶けて混ざって
もう
思い出せはしない――
闇を抱いて、
目を閉じた。

月遅れ 月送れ 月をくれ

凡用人型兵器

満月の夜は

妖怪達が騒がしい

人間も満月の夜は血が騒ぐと言うけれど

より精神寄りの妖怪は　もっと影響を受け易い

簡単に言うと調子に乗りやすくなる

月は彼女らにとって力の源、その妖力も増…

まあ

そんなもん
ですよね

END.

フワーッ

ようこそ地底へ
リグル・ナイトバグ

ザッ

御機嫌よう
ヤマメ

酒は飲んでも飲まれるなという御話

描いた人:Step

ところで前から気になってたんだけどクモって蟲なの？
専門家のお二人さん

もちろん、蟲というのは小型動物全部をさすんだ

まさか、クモと昆虫は魚と犬猫ぐらい全く別の生き物だよ
ほ

だからクモも私の眷属だよ

だからクモはリグルの眷属じゃないの

蜘蛛って字に蟲偏が入ってるよね？

リグルに分類学は難しすぎるかな？

伝染病は蠅や蚊の協力がなくちゃ広がらないよね

蛍って蜘蛛の巣にひっかかるんだけど毒があって不味いよ

スペル

カード

ザッ

——あ、ちょっと待った

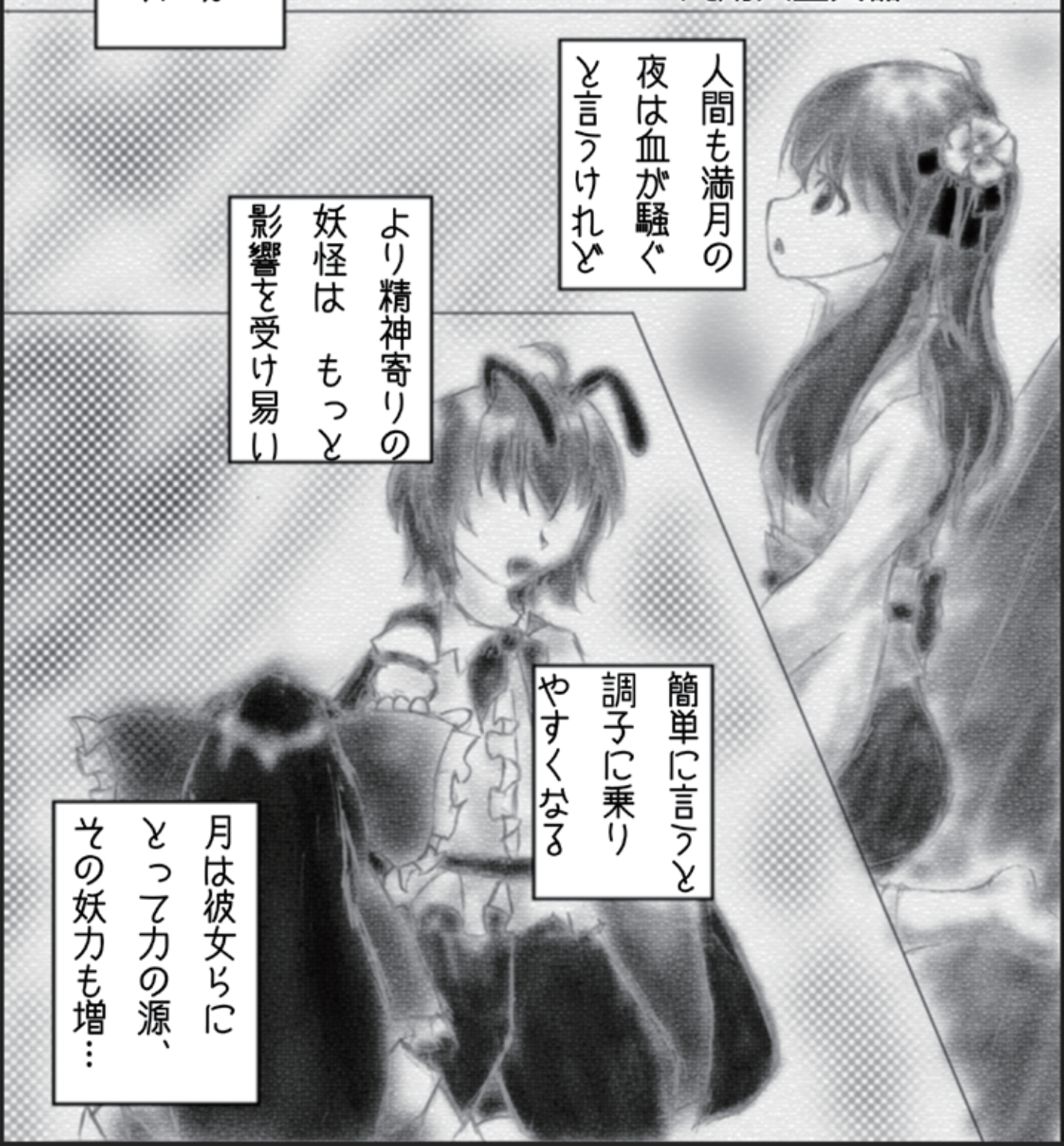
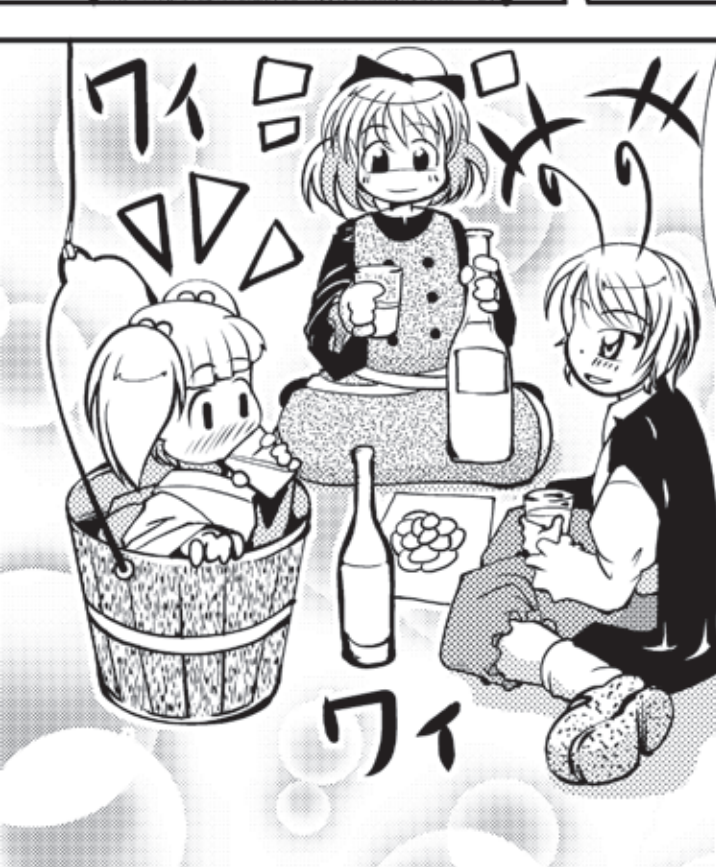
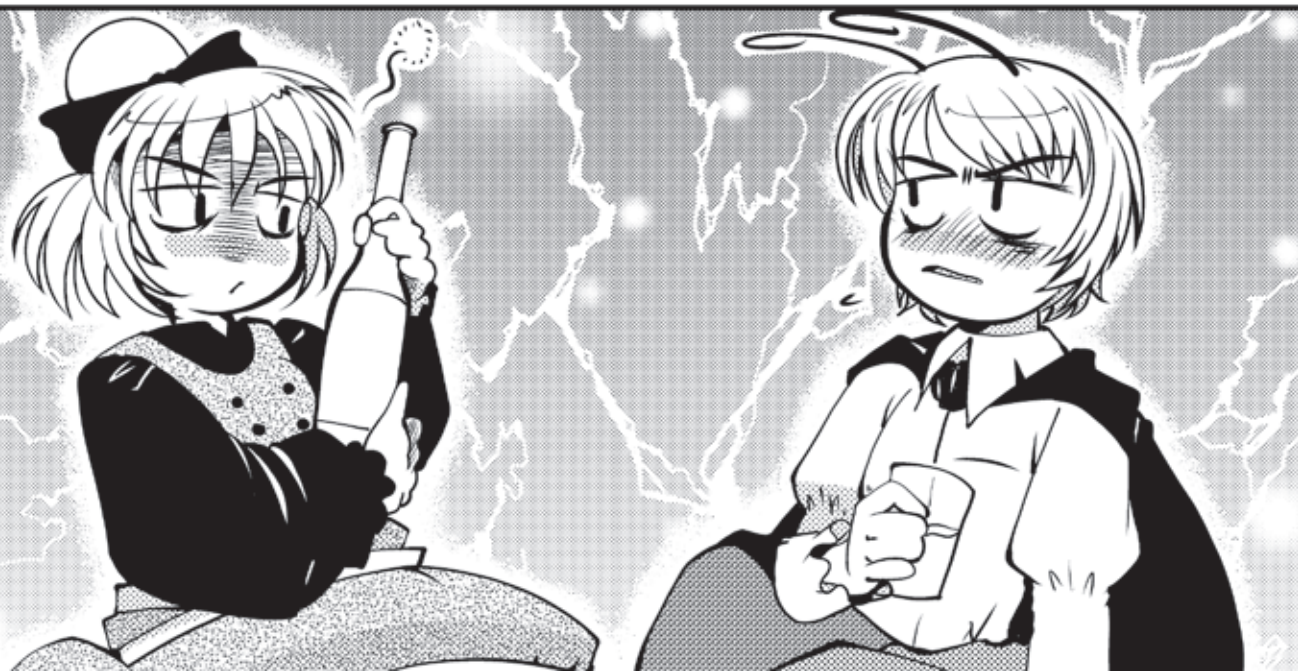
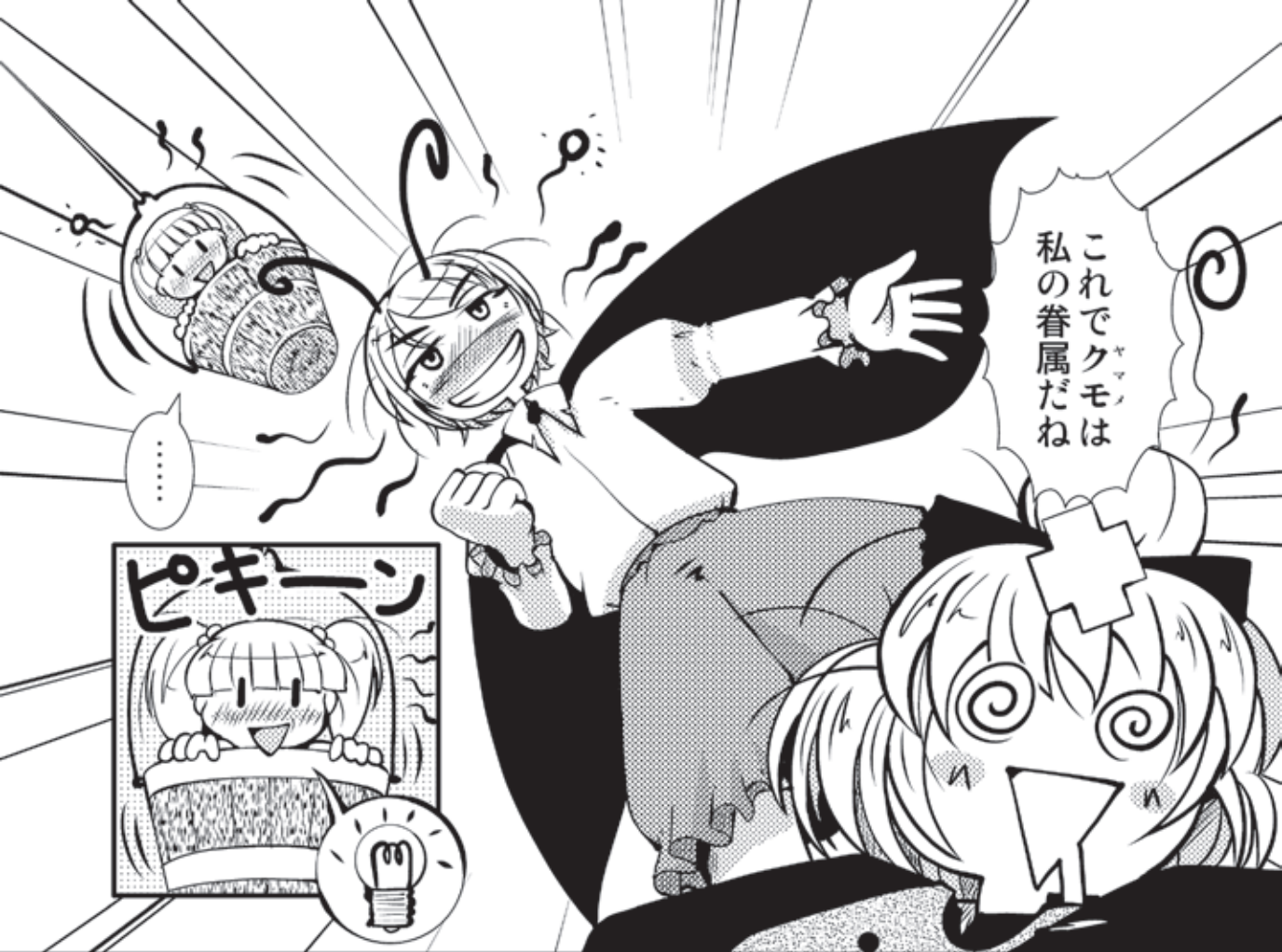
カラカラ

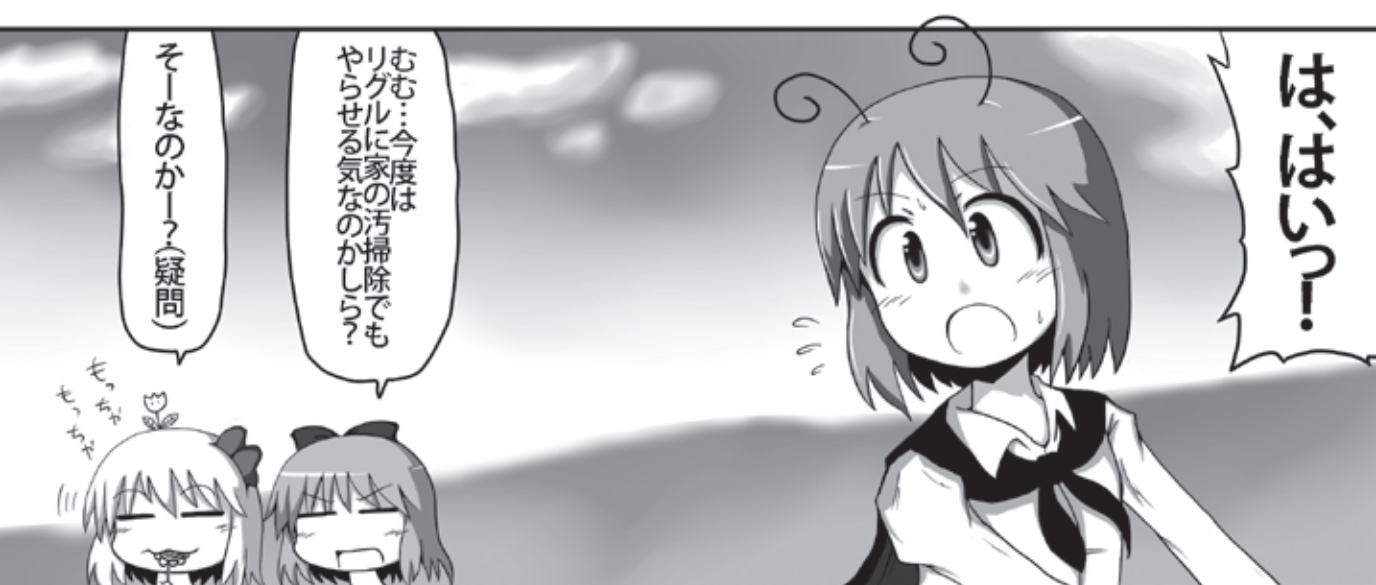
罠符

キスメ、流れ弾のこない高さまで上がって

ゴッ！

「蟲符」意打ち

これでクモ(ヤマメ)は私の眷属だね
……
ピキーン

幽香さん、草抜きと水やり終わりました～
ご苦労様 じゃ次はあっちの畑の土を耕しておいてちょうだい
は、はいぃ
休んでないで早くしなさい！
バタン
幽リグのウワサ
描いた人　東
リグルのやつなんであんなひどい女の手伝いなんてしてるんだろ？
なんか見てて気の毒だよね あんながんばってるのに怒られてばっかで
でも、怒られてる時のリグルなんかちょっとだけ嬉しそうじゃない？
すいません… すいません…
ドMだから仕方ないね…
チルノとルーミアが見てるだけ
ハァ ハァ

夕方になって…
リグル、それが終わったら
私の家に来なさい
は、はいっ！
むむ…今度は
リグルに家の汚掃除でも
やらせる気なのかしら？
そーなのかー？（疑問）
それとも、リグルに何か、その…
とても怪しいことをする気なのかも…
よ～し！
こっそりあとをつけるよ
ルーミア
ビッ!!
そーなのかー（了解）

ゆうかりん
ランド→
わぁ、すごい…
幽香さんってすごい
料理が上手なんですね！
こ、これくらいできて当然よ
おかわりいる？
なんだ、料理をご馳走してもらってたのかぁ
あの女、案外いい人なのかも…
おいアホ！リボン食うなよ
結局なんでリグルがあんなに働いてるのか
わかんなかったけど、まぁいいや…
あたいらも帰って
晩ごはんにしようか
そーなのかー

それは、その…

もうすぐ私の大切な人と
出会って一年の記念日なんです
だから、内緒でプレゼントを
用意したくて、それでお金が
必要なんです
幽香さんには無理言って
働かせてもらってすいません

そのころのチルノたちは…

クシュン！

最強のあたいがくしゃみなんて
きっと誰かがあたいのウワサでも
してるのね！

そーなのか！…(嫌)

おわり

蟲とサディストとチューバッカ

羅外

続きません。

コダクリ思考

描いた人：涼音 奏

なんか知らないけど
空から巷で噂のHGSSが！
なんで!?
ヒント：御都合主義
サッ

せっかくあるんだし皆で遊びましょ
DSもある…
ドラゴンとかヨユーなあたいマジサイキョー
ドン
そりゃやるけど…って
あぁッ!?

あーもーチルノの所為で主人公が男の子に…
だ ダイジョーブ！イワカンないし
そういう問題じゃ…

※チルノの動揺により[illegible]は消えてしまいました

そこリセットしないんだ
受け入れ始めてる…

一週間後
氷・水パ
二人とも大変だったねぇ
飛パ
悪・毒パ
もー こおりタイプが すくなくって
私もー
悪タイプ なんて全然
虫パ
私は
面子は楽に揃ったけど…
あっ リグル♥
もともと貧弱だし
やまおとこは鬼門だし
ヘラク●スはなかなか出ないし
メタルコートは殿堂入り後だし
つーか
バ●ビートと
イル●ーゼ出ないし
なんていうか 私らしさ?が…
一気になくなった 感じがしてさ…
蜘蛛パ
え? 全国図鑑後の 虫取り大会で 出るじゃん
マジで!?
それより私の ア●アドスがさー あ 切らないでよー

風が吹き、木々がざわざわと鳴っていた。
その中で、リグルは藍を見下ろす形で立っている。地面に横たわる藍は、その苦痛に顔を歪ませていた。その瞳には、僅かだが涙が浮かんでいる。
「くそ……こんな、はずは……」
藍の呻くような、小さな声。涙の理由は、苦痛なんかじゃないのかもしれない。リグルには、それを確かめる術は無かったが、なんとなくそんな気がした。
兎にも角にも、これで二人の戦いは決着がついたのだ。
ふぅ、とため息。これで終わったのだと思うと、一気に全身を駆け抜けていた緊張が解けるのを感じた。それと同時に足元から力が抜けていき、その場にペタンと座り込んでしまう。
リグルは藍の様子を見ようと首を動かした。藍は体のあちこちに怪我をしてはいるようだが、致命傷となるような傷は見た感じでは確認できなかった。良かった、と安堵する。
「自分でやっといてなんですけど、大丈夫ですか？」
「ふん……お前にそんなことを言われたら、私の立つ瀬がないじゃないか」
「あはは、それもそうですね」
はぁ、と藍からもため息が聞こえた。リグルに情けをかけられたせいか、藍の緊張も解けたらしい。
リグル・ナイトバグは八雲の式、八雲藍との弾幕勝負に挑み、そして勝った。それが、今回の事件の結末だ。
いや、それは違う。これもまた、通過点なのだ。ここで勝ったことさえ、始まりに過ぎない。リグルはその事を思い出し、立ち上がる。
「リグルー！」
「大丈夫なのかー！」
きっとどこかに潜んで一部始終を見ていたであろう、チルノたちが走り寄って来る。
その顔は、一様に笑顔だった。みんながリグルの無事を喜んでいる。なので、リグルも笑顔でみんなを迎えた。
「みんな、良かった無事だったんだねって、うわぁ！」
「もう、どうしたっていいのよ。いきなりなんかリグルは変になってるし、なんか八雲の式神とかやってくるし、なんか弾幕勝負になってるし、心配したじゃない！」
走り寄って来たミスティアにいきなり抱きつかれ、体勢を崩しそうになる。なんとか踏ん張り、それを堪えるが体に痛みが走るのはどうしようもなかった。だが、その痛みも一瞬だった。今は、この温もりが傷み以上の感情をくれているのだから。
そこまでなら良かったのだが、ミスティアの真似なのかチルノとルーミアまでもが飛びつくように抱きつこうとしている。リグルがそれに気づいて止めようとするものの、時既に遅し。そのまま四人でばたんと倒れてしまう。
更に、それを見た橙までもが駆け寄ってきて、上に乗っかるように一緒に倒れこんでしまった。心配してくれていたのはわかるのだが、みんなのまさかの行動にリグルは叫び声を上げるしかなかった。
「いや、ちょっみんな、気持ちは分かったから、だからどいてー！？」
だがリグルの叫びも空しく、みんなは抱きつきながら離れようとはしなかった。
ちょっとした苦しさに耐えつつも仕方ないなぁ、と苦笑い。ふっとリグルが顔を上に向けると、そこには覗き込むようにして魔理沙と慧音が立っていた。
「いやいや、人気者だなぁお前さんは」
「みんな、お前のことを心配していたのだ。もう少し位はそのままでもいいんじゃないか？」
二人とも笑顔でさらりと酷いことを言う。どうせ他人事だとでも思っているのだろう。
でも、その笑みに釣られてリグルも笑顔へとなっていく。今だけは、辛かったこともこれからのことも忘れて、笑っていたい。そう思ったから。
だが、次に聞こえた声でみんな現実へと引き戻されることになった。
「あらあら、感動的な場面ですわね。私も混ぜてもらって宜しいかしら？」
はっとして、リグルは声のした方向へと視

線を向ける。
　そこに居たのは、僅かに薄暗い森の中だというのに優雅に、しかし不自然な日傘を刺した人物。日傘を持つ手とは逆の手には、扇子を持っている。
「八雲、紫さん……」
　リグルと戦った八雲藍の主にして、大妖怪として幻想郷中で恐れられる存在。
八雲紫。その人だった。

ひとまずの終着、そして明日へ

著者：　夏樹　真
挿絵：尾巻ニゲル

先ほどまでの和やかな雰囲気が一転した。紫の登場により、一瞬で場の空気が変わってしまったのだった。

八雲紫という存在。藍に命令を下し、そしてリグルを止めようとした張本人。

リグルはチルノ達の下から這い出すと、みんなより一歩前に出て、紫と対峙するように立った。

怖くないといえば、嘘になる。リグルの前に立っているのは、幻想郷の中でも大妖怪といわれる紫なのだ。藍ですら、本来ならば勝ち目の無いような相手なのに、その主なのだから実力の差は歴然といえる。震える体を気づかれないようにと、無意識のうちに全身へ力が入ってしまう。

そんなリグルを前に、紫は余裕を含んだ笑みを浮かべていた。まるで、そんな強がりなどお見通しとでも言わんばかりに。

そんなリグルを庇うように、魔理沙と慧音が前に出る。二人は紫と対峙するように構えを取る。

「藍がやられたから大ボスの登場ってわけかい?」

「手負いのリグルでは相手として不足だろう。ここは私たちが相手になろう」

スペルカードを構える二人を見て、紫はキョトンとした表情をする。そして、クスクスと笑いだした。

「勘違いしているようだけども、別に私はリグルに危害を加えるつもりは無いわよ。そんな必要も無くなっているわけですし」

その言葉に、今度は逆に魔理沙と慧音がキョトンとした表情をすることとなる。

「んじゃお前さんは何しにきたんだよ」

「そうねぇ、ちょっと蟲の王女とお話がしたくて、かしら。その前に……」

紫は視線を藍の方へと向ける。その視線に気づいたのか、藍は痛みを堪えながらも、なんとか起き上がろうとしているようだった。いつの間にか藍の側に移動した橙が、それを手伝おうとしていた。

「藍、無理しちゃだめよ。貴方は重症ではないにしろ、結構な怪我をしているのだから」

「紫様……申し訳、ありません。私は……」

橙に助けてもらいながら上体をなんとか起こした藍に、紫は優しく話しかける。

藍のその瞳から、またもや涙があふれ出していた。痛みからなのか、それとも悔しさからか。

「橙。今から貴女達をマヨイガへと送るわ。そこで藍の手当てをしてあげて頂戴な」

「は、はいっ、わかりました!」

橙の返事を聞いてから、紫は扇子を持っている手を藍達の方へと向けた。

すると、二人の頭上に突如亀裂が入り、そこにスキマと呼ばれる不思議な空間の狭間が現れた。その狭間はそのまま下へと降りていき、二人を飲み込んでしまう。一瞬にして、藍と橙はこの場から消えてしまったのだった。スキマに入る瞬間、橙が不安そうな表情をしたのはリグルを気遣ってだろうか。

ふぅ、と一息。紫はもう一度リグルへと向き直り、話し始めた。

「さて。ちょっと脱線してしまいましたけども、蟲の王女よ。今回は色々と大変だったようね?」

「……はい、そうですね」

紫の問いに、静かにリグルは答えた。

今回、というのはつまり、リグルが意識を乗っ取られて暴れてしまったことを指しているのであろう。幻視蝶に意識を奪われていたとはいえ、リグルの行為は自分を支持すると言ってくれた紫の顔に泥を塗ってしまうような事だ。それは、取り返しの付かない事実であった。

リグルは少し悩む表情をしていたが意を決すると、ざっと一歩前に出る。

そして、突然頭を下げた。周りのみんなが驚くような速さで。

「ごめんなさい!」

そして、謝った。謝ったところで、簡単に許してもらえるとは思わなかったのだが、それでもリグルは紫には謝らないといけないと思った。

「今回の件は、私が悪かったんです。私がもっとしっかりしていなかったから、あの子もこんな実力行使に出てしまって……だからその、ごめんなさい!」

その突然のリグルの謝罪を予測していなかったのか、紫は少し驚いた様子であった。

そして、しばらくした後に、笑い出した。口元を扇子で隠しながら、さも楽しそうに。
「あはは、まさか最初に出てきた言葉が謝罪だなんて。ウフフ、これは完全に私の予想の裏をかかれたわね」
「え、あれ……な、何か変なことといいました！？」
リグルとしては、真面目に謝ったつもりだったのに、何故か紫の笑いを誘ってしまった。
困った表情を浮かべるリグルに、紫はその理由を説明し始める。
「ごめんなさいね、私の予想ではきっと言い訳をするかと思っていたのよ。仕方ない、みたいにね。ところが貴女は自分の非を全面的に認め、謝ってくれた。それが可笑しくて、そして嬉しくてね」
「はぁ……」
「とりあえず、貴女を過小評価していたことを謝らなくてはね。申し訳ない……いえ、ごめんなさい、というべきかしらね」
突然の紫からの謝罪に、リグルの困惑は更に深まってしまう。紫が謝るような必要性はまったくないと思うのだが。
それを見ていた魔理沙も、つられたのか笑い始めてしまう。更に慧音を見ると、そちらも声こそは出していないものの顔には笑みが浮かんでいた。
「ちょっと、なんで二人とも笑ってるのさ！」
「いやだって、なぁ？」

「まさか、紫がリグルに謝る瞬間が見られるだなんて思っていなかったのさ」
二人は目を合わせるると、また笑い出してしまう。
それに対してリグルが怒りとも恥ずかしさとも取れない微妙な感情からプルプルと震えだしたのだが、紫の声で中断せざるを得なくなった。
「さて、話が逸れてしまいましたけども。今一度、確認させてもらうわ」
その声が真剣さを取り戻していたため、リグルもちゃんと紫と正面から向き合った。
そして、その言葉を待つ。
「今回、貴女は自分の招いた失態により一部の蟲達を暴走させてしまった。そして、それによりとある農村に被害が出てしまった。間違いないわね？」
「……はい」
はっきりとは覚えてはいないものの、おぼろげに記憶の中にある光景。
自分ではない自分が、蟲達を使って人の住む農村を襲撃している。人との共存を目指していたリグルにとって、それはまるで悪夢のような出来事だ。
「意識を乗っ取られていたとはいえ、それは紛れもなく貴女という存在がやってしまったこと……」
例え、リグルが意識を乗っ取られていたからといってそれを許してくれる人が果たしてどれだけいるものか。被害にあった大多数は、簡単には許してはくれないだろう。
元々、人間は妖怪を恐れているのだ。その妖怪が悪さをして、それを過ちだったから許してくれといったところで、許してもらえる見込みなど、ほとんどないといっても過言ではない。
「でも、それでも。貴女は許しを請い、そして人と共存という茨の道を歩みたいと。そしてその覚悟があると……そうなのですね、蟲の王女よ？」
だが、それでも。リグルは心に決めたのだ。
例えどんなに困難だとしても。どれだけ厳しい道が待っていようとも。私は、必ず人と蟲がうまく付き合っていけるような方法を探し出すのだと。
もしかしたら、理解されないかもしれない。また今回みたいに、心が折れかけて問題が起きてしまうのかもしれない。ゴールの予想なんてまったく出来ないのが現状だ。
だけど、今のリグルには仲間と呼べる人達がいる。自分が迷った時に、助けてくれる人達がいる。それだけで、勇気が沸いてくるのだ。どんな困難でも乗り越えられるような気がしてくるのだ。
だから、リグルは答えた。力強く、はっきりと。
「もちろんです。私は決して負けたりなんかしませんよ。だって、みんながいてくれるんですから！」
その声に答えるように、みんなが続く。
「もちろんだとも。村の代表として、リグルを助ける覚悟は私も出来ているのでな」
「ま、手伝ってしまった縁だしな。ここで私だけが抜けるという訳にもいかないだろ？」
「なんかよくわかんないけど、リグルが困るって言うんなら最強のアタイが助けてあげるわよ！」
「リグルが頑張るのなら、何か手伝いとかは出来ると思うしねー」
「私達は持ちつ持たれつだしね。誰かが困ってるのなら、みんなで助けるのが仲間ってもんでしょ」
リグルが振り返ると、みんなが笑って迎えてくれた。
たったそれだけなのに。それだけのことが、リグルにはとても心強くて。その目から自然と涙が流れるのも仕方が無かっただろう。
その光景を見た紫もまた、微笑をたずさえていた。そして、満足そうに頷くのだった。
「素晴らしい仲間達ね。これならば、もう貴女は心配は無いでしょう。残る問題は……この子ね」
紫の声に再びリグルが振り返ると、そこには幻視蝶が漂っていた。ついさっきまでは確かに慧音達の側にいたはずなのだが、いつの間にか紫の所へと移動していた。
そして紫が幻視蝶へと手を向ける。すると、幻視蝶はスキマ空間へと飲み込まれ、いなくなってしまった。リグルが止めようとす

る間も無かった。
「幻視蝶。この子だけは、私に任せてもらうわ。小さいとはいえ異変を起こした危険な子ですから」
　紫の表情は笑ってはいるが、その中身は笑顔とは違う感情のようだった。その笑みの奥にある感情を、リグルはうまく読み取ることは出来なかった。
　リグルとしては幻視蝶を含めてやり直していきたかったのだが、どうやら紫はそれを許してはくれないらしい。今回の件の主犯だからだろうか。
「さて、それでは私はこれにて帰らせてもらうわね。それじゃ……」
「あの、待ってください！」
　だから、これだけは言いたかった。どうしても、あの子に伝えて欲しかったから。
「紫さん、あの子にこれだけは伝えて欲しいんです」
「……まぁ、ちょっとくらいならいいわよ」
　そして、リグルは紫に言葉を伝えた。
　あの子への、最後のメッセージを。

　そこは、不思議な空間であった。
　あたりには何も無く、見渡す限りが不気味な、赤紫の世界。上も下も無く、まるで水の中にでもいるかのような感覚に襲われる。そして時々不気味な目が現れ、キョロキョロと

回りを見回したかと思うと、閉じてなくなってしまう。不可思議な世界だった。
　もし、まともな精神の者がこんなところに長時間放置されてしまえば、発狂しかねないような異空間。そこに、幻視蝶は居た。いつの間にここへ送られたのか、それさえもわからない。
　何処へ行くでもなく、ただ漂うだけの蝶。その弱弱しい姿からは活力のようなものを感じられなかった。輝きも、かなり弱弱しく見える。
　ふっと、赤紫の異空間が裂ける。そこから中へ入ってきたのは、八雲紫と呼ばれる大妖怪であった。
「御機嫌よう。どうかしら、貴方が普段見ない世界は？」
　紫の問いに答えるつもりもないのか、ただフワフワと蝶は飛んでいた。最も、話すことが出来ない次点で幻視蝶に返事をする術はないのだが。
　問いかけた紫も答えを期待していたわけではないようで、お構い無しに言葉を続けていく。
「貴方が行ったことは、幻想郷に対する小さな小さな異変ですわ。それ自体は、大したこともなく終わってしまいましたが」
　紫は幻視蝶を見つめながら、淡々と言葉を紡いでいく。対する幻視蝶も、それに耳を貸すかの様に紫の側を飛んでいた。
「しかし。もしも誰も止める者がいなければ、貴方はあのまま先にある村を襲っていたでしょう。有り得ない事とはいえ、もしそうなれば小さな異変とは言えなくなっていた。私はね、そんなことをする存在を許すわけにはいかないのよ。秩序というのは大事ですからね」
　そこで一度言葉を区切り、紫は扇子を広げるとそれを水平にして幻視蝶の方へと差し出した。
　その意図を汲み取ったのか、幻視蝶はその扇子に止まると羽根をゆっくりと開け閉めする。その姿はまるで、裁判にかけられた罪人の様でもあった。
「本当なら、今すぐにでも貴方を処刑してしまいたいところなのだけど……リグルから、伝言を頼まれていてね」
　リグル、という名前が出た瞬間、幻視蝶が反応した。
　幻視蝶はリグルを操り、蟲達を扇動させて蟲の力を見せ付けようとした。言ってみれば、リグルは被害者である少女だ。そんな少女から、どのような伝言があるというのか。恨み言でもぶつけられるのかもしれない。
　紫は目を閉じると、そこで一呼吸置いた。そして目を開くと、リグルの言葉を思い出すかのように静かに語りだした。
「私が不甲斐ないばかりに、君にこんな無茶な真似をさせてしまって本当にごめんなさい。もう会うことは無理かもしれないけど、それでも私は頑張って蟲達の明るい未来を築いてみせるから。だから、安心して欲しい、ですってよ？」
　その言葉に、幻視蝶の動きが止まった。その姿はまるで呆気に取られて放心してしまった子供のようにも見えた。
　紫は扇子を手元に寄せると、子供に言い聞かせる母親の様に言葉を続けていく。
「まったく、自分を利用しようとした存在に対して寛大すぎる。いや、これは甘さと言ってもいいかもしれない。でも、それこそがあの子のいいところでもあり、欠点でもあるわ。あなたもそれは分かっているのでしょう。だから、自分が代わりにと考えた。違うかしら？」
　幻視蝶が、ゆったりと羽根を開いたり閉じたりする。その体から周りを魅了する光が徐々に失われていく。その姿は、まるで悲しんでいるかのようにも見えた。
「さて、貴女の処罰を言い渡すわ。生まれた世界とは違う世界で、貴女は普通の蝶として過ごすの。そして、人々からいつしか忘れられ、いつかまたこの幻想郷へと帰ってきなさい。そして、あの子の成果を見届けなさい。それが、私から貴女に下す罰よ」
　この紫の下した罪が、果たして重いのか軽いのか。それは、下された幻視蝶本人には判断が出来なかった。紫は一体どういうつもりでこんな判決を下したのだろうか。
「さようなら……いえ、また会いましょう。果たしてそれが何年後なのかはわからないけ

どね」
紫の言葉の後に、突如辺りが眩い光に包まれる。そして幻視蝶は意識を失った。

気がつけば、そこは幻視蝶の見知らぬ世界であった。先ほどまでの異質な空間とは違い、そこにはちゃんと地面があり、草木が生えていた。
ただ、違う点としては不思議なものが沢山あったことだった。巨大な家のようなもの、凄い速さで走っていく不思議な箱など。よくわからない物が沢山溢れていた。
また、空気が明らかに悪い。息をするのも苦しいような、そんな空気。
幻視蝶にとって、完全な未知の世界であった。
（……帰らないと）
そんな思いが、不意に幻視蝶の中に浮かんできた。理由もよくわからない、更には何処へ帰れば良いのかすらわからない不思議な思い。
しかし、それでも幻視蝶は飛びだした。帰路へ向けて、弱々しくもただひたすらに。

ある晴れた、昼下がり。
リグルはマントを外し、シャツとズボンの

みという軽装でせっせと木材を運んでいた。
その小柄な体には不釣合いな、巨大な木材だ。大の大人が数人で運ぶようなものを、よたよたと危うい足取りながら一人で運んでいる辺りは、小さいながらも流石は妖怪といった感じだろうか。
指定の場所に木材を置き、リグルはふぅと一息ついた。
「おう、嬢ちゃんもって来てくれたかい。助かるよ」
「えへへ、これでもちょっとは力がありますからね。あと嬢ちゃんはその、恥ずかしいんですけど！」
「あっはっは、見た目からして嬢ちゃんじゃねぇかい。細かいことは気にするんじゃないよ」
もう、というリグルの呟きは家の上で作業をしているおじさんには聞こえなかったらしい。その顔には、大粒の汗が浮かんでいた。
リグルが被害を与えてしまった農村へ謝罪と復興の手伝いをしにきてから早くも一週間が過ぎていた。
初めこそは予想通り、農村のみんなが難色を示していた。それもそうだろう、自分達の農村を攻撃してきた妖怪と一緒に復興するだなんて、普通に考えてありえないことである。
だが、リグルの真剣な態度と、慧音の口添えによりなんとか復興の手伝いをする事になった。それでも最初はみんなが警戒をしていたのだが、今ではほとんどの人がリグルを信頼してくれているようだった。リグルとしてもそれが嬉しかったので、必死に頑張って手伝うという良い循環となっていた。
「おぉ、頑張ってるようじゃないか。感心したぜ」
「なんだ、魔理沙じゃない」
リグルの上空から声をかけ、箒に跨った白黒の魔女がゆっくりと降りてきた。
よっと声を出して魔理沙は地面へと着地する。そしてズレでもあったのか帽子を触って位置の調節をする。しかしどうにも気に入らなかったのか、一度帽子を取るとふんっと一度深く被った。そこから調節していき、やっと満足いったのかうんうんっと頷いた。
「最初こそはどうなるものかって思ってたけど、なんとかなって良かったな」
「本当にね。みんな良い人達で助かったよ。お陰で私も凄く頑張ろうっていう気持ちになるしね」
「良い事だぜ」
魔理沙の話に満面の笑みでリグルは答える。
その笑顔があまりにも素敵だったので、自然と魔理沙も笑顔になってしまった。こっそりと、屋根の上から笑い声も聞こえたりした。
その時、遠くの方から声がした。おーい、という声はそのまま近づいてきて、やがて三人の少女の姿が見えてくる。それはどうやらチルノ、ルーミア、ミスティアだった。心なしか、その表情がムッとしているもののように見えなくもない。
「お、なんだあの三人も手伝いか？」
「あれ、おかしいなぁ。手伝いは昨日だったはずだから、今日は用事は……あ、しまった」
はっとリグルは何かを思い出したらしい。顔がどんどん気まずそうなものへと変わっていく。
あぁ、と魔理沙はそれだけでなんとなくの予想がついてしまった。どうせ、約束をダブルブッキングしてしまったとかそんなことなのだろう。
「もぅ、リグルったら何してるのよ。今日はあたいたちと遊ぶっていう約束だったでしょ！」
「そうだよ、ずっと待ってたんだからー」
「え、えーと……その、ゴメン……」
問い詰めるようにやってきたチルノ達に、たじたじなリグル。
どうやら、魔理沙の予想は見事に的中してしまったらしい。やれやれだぜ、と魔理沙は肩をすくめる。
その騒ぎを見ていたのだろう。屋根にいるおじさんから大きく笑いながら覗き込んできた。
「はっはっは、人気者だな嬢ちゃんは。よし、今日はこれくらいで大丈夫だからみんなと遊びにいってくるといい」
「えぇ、いいんですか？」

「おうよ、その代わり明日からも頼むぜ？」
「はい、もちろんです！」
　無事に許可も降り、リグルは近くに置いていたマントを羽織るとそのままチルノ達と走っていってしまった。
　やれやれだな、と魔理沙もそのまま箒に跨り、ゆっくりと空へと浮かんでいく。おじさんに軽く手を振り、そのまま本来の目的地である博霊神社へと行ってしまった。
　こうしてささやかな異変は終わりを迎え、またいつも通りの日常へと戻っていった。
　多少、変わったことといえば。リグルがみんなを頼るということを覚えたぐらいである。
　それは本当にささやかな、しかしリグルにとっては確実な前進といえるだろう。
　今日も、幻想郷はのんびりと時間が流れていくのだった。

（終）

〈作者コメント〉
　夏樹です。ついにダラダラと続いていた連載も終わりましたね。最後は豪華に挿絵まで頼んでしまいました。尾巻たんありがとう！
　それでは、一人でも読んでくださったかがいましたら作者として本望ということで。ありがとうございました！

蛍火は幻想のように儚く消え逝く

～ Bustum Lucciolae ～《初夏》

著者：西遊

††

命短し舞い飛べ蛍。

††

盛夏は光陰のように過ぎ去り、夏も酣、少しずつ空が高くなる。
そうなれば夏は終わり、やがて秋が来る。
蛍二十日に蝉三日。蛍の命は夏と同じ。
だから、夏の終わりは、蛍の終焉を意味する。
そして、蛍の妖怪、リグル・ナイトバグは、薄々と気づいていた。

自分の死期が近い、と。

リグルは蟲といっても、蟲の妖怪である。そんじょそこらの蟲達のように、季節ごとに生まれ死んでを繰り返すわけではない。妖怪は妖しく怪しく変化した者、ほとんどがまさしく妖怪じみた長命で、死という単語は長く遠い生の先の未来に掻き消される。
それでも、いくら長命でも、どれほどの妖怪でも、死は存在する。
動いているモノはいつか止まる。生きているモノはいつか死ぬ。それは当然の理で、その道理が通用しないのは生きても死んでもいないモノだけだ。

そして、その時が自分に来ただけのこと。
それでも、怖いものは怖い、亡くなることが、無くなることが、今までの全てが泡沫のように消えてしまうのが怖い。
だからこそ、最後は、最後だけは、自分の好きな場所で眠りたいと、そう思った。
そして、ここに辿り着いた。
蛍のように、夏を精一杯輝く向日葵が咲き誇る花畑。黄色の花弁を限りなく広い青空へと広げ、地上の恒星のように向日葵は有限の光輝を放つ。
そこに佇むのは、凛と咲き誇る、一輪の気高き花。
フラワーマスター、彼女は全ての花であり、そして何の花でもない。何にも染まらず、何にも染められず、花開く傍らにただ寄り添い、花と共に在るヒト。
私の憧れ、私の先生、そして、私の好――

††

身体が重い。
そうリグルが感じたのは、三週間前のことだった、
その日は夜行性の彼女にしては珍しく、朝方に目を覚ました。『珍しく』とはいっても、

ここ最近はほとんど昼型の生活を送っているのだが。そして、身体の動きがいつもより鈍いことに気づいた。四肢が重く、鈍いというよりも、だるいという表現のほうが合うような、仄めいた倦怠感。そのときは特に何とも思わず、ああ今日はちょっと調子が悪いな、早起きしすぎたかな？　もしかしたら『あの日』かもしれないな程度にしか思っていなかった。

　起きてまず、いつもどおり『蟲の知らせサービス』の確認をする。予定表にチェックマーク。蟲を送り出して、予定に合わせて使いの忘れっぽい蟲頭でも、紙に書き込んでおけば忘れることは無い。幽香さん直伝の生活の知恵だ。

　あっちの女性のお客さんには瑠璃色が綺麗なルリアゲハで優雅な目覚めを。こっちの男のお客さんには注文どおり『素晴らしい目覚め』の蜘蛛と蜂を。この寺子屋の教師ってのは……頭突きで蟲が死んじゃあ敵わないから、私が直々起こしに行ってあげようかな。よくお世話になってるし。

　そうして蟲を送り出したら、パジャマからいつもの服に着替える。お気に入りのマントを格好良く羽織り、鏡は無いけれど少しポーズをとってみ

　フラッ、と、

　それは何の前触れも無く何の音沙汰も無く何の虫の知らせも無くなく訪れた。

　貧血のような感覚、力が抜ける錯覚、意識が遠く向こうへと霞む。

　なんとか意識を持ち直して壁に手をつく。辛うじて立っている状態、立っているのがままならない、しかし座りたくても体が言うことを聞かない。

　リグルは壁に体を預けて、背を滑らせて床に座り込んだ。

　深呼吸を、一つ、二つ、三つ、四つ。

「…………………よし、なんとか、大丈夫、だ」

　まだ意識が茫漠としている。足がまだおぼつかない。体が激しく脈を打っている。その拍動に合わせて、激しい頭痛の波が襲ってくる。

　それでも頭の一部、思考は正常に動いている。

　ならば、大丈夫だ。

　妖怪は身体的に脅威の再生能力を持っている。バラバラにされれば流石に死んでしまうけれど、どんな重症でも一晩で治ってしまうぐらいには治癒能力は高い。だから、身体的な頭痛など、それほど苦ではないのだ。それでも、頭痛が続けば精神的に辛い。

　足に力を入れて、壁を頼りに立ち上がる。

　深呼吸を、一つ、二つ、三つ。

「……そろそろ、幽香さんのところに、行かなきゃ」

　妙に冷静な頭でふと思い返すのは、あの気高く眩しい一輪の花。

　少し前から、リグルは幽香にいろいろと勉強を教えてもらっている。幽香に気に入られて手取り足取り、というのもあるが、憧れの人から教えてもらっているという喜悦感や、蟲の使役や花の効果などまだ知らぬ万象を学びたいという好奇心もある。

「勉強とは探求」とは幽香の談、「求めよ、さすれば与えられん」も幽香の談。リグルがあれを知りたいと求めると、幽香は懇切丁寧にわかり易く教えてくれる。

　だからこそ、幽香との約束を、時間を、無碍にはできない。

　彼女のお蔭で、楽しく知識を増やせるのだから。

（……そういえば、幽香さんから貰ったハーブが、あったような）

　ふと思い出し、リグルはまだなおぼつかない足取りで棚へと歩み寄る。棚の横、紐で纏めて吊るされているハーブの束から一房もぎ取り、簡素な台所でポットに入れる。

　とある用事で香霖堂で譲ってもらった、黄緑を基調とした落ち着く色合いのティーセット。ハーブを入れたそのポットに、中の液体の温度が冷めない魔法の瓶――香霖堂の店主曰く、名前もそのまま『魔法瓶』らしい――のお湯を入れる。そして、まだ続く頭痛休めに何分か待ってから、カップに淹れる。

　なみなみと縁を揺れる、グリーンともイエローとも言い難い不思議な色合いのローズマ

リーのハーブティー。
　ハーブは香りを楽しむもの、特にローズマリーの鼻をすり抜けるような香りは脳を活性化させる効果がある。
　スウッ、っと大きく鼻で息を吸う。清涼感のある強い香り。頭痛でもやもやと靄がかかったような脳が一気に冴える。香りを楽しんだら、あとは飲んでティーを味わう。甘く落ち着いた味。ローズマリーには血流促進の効果がある。それが手足に効けば冷え性の解消、身体全体に効けば発汗作用、脳に効けば頭痛緩和と、箇所によって効能が変化する。
　……まあ、これも幽香さんからの受け売りなんだけど。
　幾分か回るようになってきた頭でそう思いつつ、少しずつカップを傾ける。
「うん……美味しい」
　身体的にも精神的にも落ち着いたところで、改めて深呼吸を一つ、二つ。頭痛はすっかり止んだ。よし、これで、いつもどおり。
　今日は快晴。蛍はまだまだ飛び盛り。
　そしてリグルは、何事も無かったように思い切りドアを開け放ってマントを翻す。夏の太陽は今日も燦々と輝いている。蒸し暑い大気、生命の息吹溢れる大地、その息吹を吸い込むように大きく深呼吸を一つ、
　そしてリグルは、陽光煌く青空へと飛び上がった。

††

　暑中の炎天下の中でも、花は美しく咲き乱れている。特に夏には向日葵が。それはまるで、地上の恒星のように。
　その地上の恒星が燦々と咲き乱れる花畑の外れに、彼女の家はある。
　花の中に佇む夢幻（ゆめまぼろし）のような館。探すまでもなく、その絶景の花畑を見渡せるテラスに、彼女はいた。
　日傘の下、緑の髪を風に靡かせ、まるで一輪の花のようにその存在を咲き誇らせる。
　風見幽香。
　それが、彼女の名前。
「おはようリグル、今日は遅かったじゃない……どうしたの？」
　笑顔を覗かせる幽香さん。他の皆は口々にあの笑顔は怖いと言うけれど、それは違う。敵対心を見せるから、幽香さんもそれ相応の力を笑顔の裏に潜ませる。
　――「先従隗始。事を成すには先ず自分から。……勉学も、親交もね」
　そう紫さんが言っていた。学を修めたければ自分から学べ、親しくなりたければ自分から接せよ。
「いえ、ちょっと寝坊してしまって」
　だから私は、自然に幽香さんに話しかける。気高く咲き誇っていても、彼女とて一人の妖怪であり、一人の女の子なのだから。
「自分から教えを請いておいて寝坊なんて……お仕置きが必要かしらね」
「ひえぇ」
「なんてね、嘘よ嘘。じゃあ始めましょうか」
　そういって幽香さんはスカートを翻して屋内へと歩いていく。その後ろを追うように、私も家の中へと入っていった。
　今日は理科。
「時節は大暑。桐始めて花を結び、腐草蛍と為る候。どうせだし、身近な事象の実験でもしましょうか」
　幽香さんはよく実験をしてみせてくれる。
　――「百聞は一見に如かず。何遍も聞くよりも実際に見たほうが経験として記憶に残るでしょう？」
　その言葉通り、実験をやる度にその不思議な結果に瞠目し、興味を惹かれ、そして経験として記憶に根付いた。ちんぷんかんぷんな実験でも、身近な例に譬えて説明してくれるから自分の持つ知識と関連付けしやすい。
「それで、今日は化学発光よ」
「科学発行？」
「字が違うわ」
「可逆反応？」
「……リグル、貴女熱でもあるのかしら？　ちょっとこっちに来なさいな」
「えっ、あっ……うう」
　言われる通りに幽香さんに近づくと、ピ

タッと額に手を当てられた。細く白い指先が冷やっこい。夏になっても手足が冷たい人がいるけど、幽香さんはその類の人なのかもしれない。

　丁度幽香さんの、その、たわわな胸が視界の真正面にあって、視線のやり場に困って目を逸らす。逸らした先には、白いシャツに包まれた華奢な腕。一体この腕の、この華奢な身体の何処に、あんな幻想郷でも屈指の力が隠されているのだろうか。

「うーん……大丈夫みたいね。でも無理は禁物よ、何かあったら言いなさい」

「あ、はい……」

　それにしても、今朝の頭痛がまだ響いているのだろうか？　耳から入ってきた単語が誤変換されるように、目から入ってきた情報が波打っているように、脳が冴えないというか、余波がまだ脳を揺さぶっているような、余波にまだ脳が揺さぶられているような感覚。既に離された幽香さんの手の冷たさが少し愛おしい。

「で、続きだけど……化学発光よ、化学発光。簡単に言えば、光るの」

「えらく簡単ですね……」

　まあ『光を発する』だから、あながち間違ってはいないけれど。

「じゃあ早速。試薬はルミノールと過酸化水素。この二つだけよ」

　コトリと実験台の上に置かれたのは、二つの小さなガラス瓶。はて、この小瓶、どこかで見たことあるような……特に最近、永遠亭で見た記憶があるような。

「あら、よく覚えてるわね。この試薬は竹林の医者に譲ってもらったのよ。流石あらゆる薬を作る程度の能力、試『薬』もきちんと調製してくれたわ」

　流石薬師の面目躍如、あとでまた永遠亭にお礼に行かなきゃ。永琳さんには度々お世話になってるし。

「えっと、過酸化水素は確か……シュワシュワして消毒作用があるんですよね？」

「正解。ではルミノールは？」

「えーっと……」

　口に手を当てて考え込む。はて、ルミノールなんて物質は滅多に聞かない。というか、初耳かもしれない。悔しいけれど、自分の知識内にないものはわからない。でもそれは仕方のないこと、知らないことを学ぶのが学習なのだから。

「まあ私もわからないのだけれど……ルミノールはこの実験と、その応用の為だけに使われるようなものかしらね。とりあえずやってみた方が早いわね」

　そう言って幽香さんは、三角フラスコの中に過酸化水素とルミノールを静かに注いだ。注ぐ時は縁を合わせて、ラベルは上方に、薬瓶の扱いにも気をつけて。

「でも、この二つを混ぜただけでは何も起こらないの」

「ふぇ、そうなんですか」

「そう、そしてここに——血液を入れるの」

　その時、幽香さんの目の色が、変わったような気がした。背筋が凍るような感覚。左手に持たれた銀のナイフが鈍く光る。いや、ギラリと鈍く光ったのは、ナイフだろうか、それとも、その鋭い眼光だろうか。そう本能で怖気づいていた間に、幽香さんはその銀のナイフで、スッ、と自分の指先を切った。切創から、赤く紅く朱い血が一筋流れる。

　その鮮血が、ポタリと一雫、溶液に中に落ち、

　そして、それは発光した。

「うわぁ……！」

　指先から流れ落ちた血液の雫は溶液を穿ち、波紋を広げ、そして液体が青白く光を放った。

　たった三種の液体が織り成す、摩訶不思議な蒼白の発光。思わず息を飲んでしまう。

　しかしそれも一瞬の発光で、息を飲んでいる間にそれは終わってしまった。

「残念ながら、この量だと発光時間は今みたいに短いの」

　ふぇ、それは残念というか、でも、その一瞬の輝きは神秘的で、まるで夏の夜に瞬く蛍のような……。

「そう、リグル、実は蛍の発光原理も、これと同じような原理なのよ。言ったでしょう？　『どうせだし、身近な事象の実験でもしま

しょうか』って」
「そう、だったんだ……」
私は蛍の妖怪、幽香さんはそれを酌んでくれたのだ。これほど嬉しい知識はない。
「それで、この発光の原理だけど、血液中のヘモグロビンの中の、色素成分である『ヘム』が触媒……って、蛍光反応……のよ」
（――――!?）
突然、頭の中にノイズが響いた。耳鳴りのような、頭痛の波が一気に増幅されて、鼓膜を揺らしているような感覚。
「正……はヘムの中の鉄……錯体と呼ば…………子の中心に金属原……」
視界が揺れる。頭がガンガン音を立てている。幽香さんの解説が頭に入ってこない。フワリと、ユラリと、身体が揺れる。二本の足で直立するのが辛い。力が抜ける。意識が抜ける。
あっ、ヤバい。

そう頭に浮かんだ時には、もう身体は地面に向かって倒れ

「リグル、リグルッ！　――大丈夫!?」
失いかけた意識が一瞬で舞い戻る。耳に響く声、安心する声、心落ち着く声。まだピントが合わない眼を右に向けると、そこには心配そうに顔色を伺っている幽香さんの顔があった。
どうやら、地面に倒れる瞬間に幽香さんに抱き止められていたらしい。
「あっ……幽香さん、大丈夫、です、よ？」
「ぶっ倒れるような奴は大丈夫って言わないわよ！」
「あう、幽香さん、あんまり、怒鳴らないで、頭に、響きます……」
心配そうな顔の幽香さん。――ああ、幽香さん、何故そんな顔をしているのですか。幽香さんにはそんな顔は似合いません。いつも笑顔で、花と共に在るのが、貴女に相応しいのに。
だから、虚勢を張った。
「ほら、もうちゃんと立てますし、実験の説明も最後まで聞かないといけないですし、後片付けもしなきゃいけないですし。幽香さん、言ってたじゃないですか、片付けるまでが実験だ、って」
虚勢を、張ってしまった。
「大丈夫です、ただの立ち眩みですよ。だから、続き、お願いします」
私から幽香さんに教えを請うているのに、その私が倒れてしまったら、それは幽香さんに失礼だ。なら、私がやるべきことは、心配を掛けず、迷惑を掛けず、教えられたことを余す事無く吸収すること。
「…………わかったわ、でも、再三再四しつこく言うようだけれど、絶対に無理は禁物よ。今度倒れたらお仕置きしてあげるんだから」
「……ありがとうございます」
「そのありがとうございますは何に対しての感謝なの？　お仕置きしてほしいのかしら？」
ぐりぐりと責められる。
「幽香さんのお仕置きなら、ちょっと、嬉しいかもです」
「……馬鹿な事言ってないで、ほら、手貸してあげるから、椅子に座りなさいな」
「はい……」
幽香さんに手を引いてもらって立ち上がる。まだ襲い掛かってくる頭痛は、執念で捻じ伏せた。邪魔をするな、私は幽香さんに教えてもらうんだ――だから、邪魔をするな。
手を引いてもらったときに繋いだ手は、冷たかった。
それでも、手が冷たい人は、代わりに心が温かい、そういう話がある。
優しい幽香さん、花開く傍らにただ寄り添い、花と共に在るヒト。
だから、その優しさを無駄にはしたくなかったのに、
その後の説明は全く頭に入ってこなかった。
幽香さんはずっと私の心配をしてくれていたというのに。
「――じゃあ、今日はここまで」
「はい、ありがとう、ございました」
そう、最後まで、幽香さんは私の心配をし

てくれたんだ。
なのに私は、虚勢を張って、それを無碍にしてしまって。

ごめんなさい。

その言葉は、声に出すことは、できなかった。

《仲夏》へ続く〉

〈作者コメント〉
夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢の多く飛び違ひたる。

◆著者ホームページ
http://cieloaz8.web.fc2.com/

地位向上を目指して －闇と虹－

著者：如月翔

場所を知ってそうな誰かに道を聞いておけば良かったかもしれない。
私…いや私達は、普段立ち寄らない場所を道を知らない者同士で歩くということが、どれほど無謀か理解していなかった。
「……」
「あはは…」
「ここ…何処…？」
「ごめんリグル、何処か判らないや」
確かにルーミアは、場所を覚えていないと言った。
場所を覚えていない彼女に全てを任せた私が悪かったのかもしれない。
いや…かもではなく悪かったのだろう、ここで文句を言っても仕方がない。
道案内を頼んだのは私で、快く引き受けてくれて嬉しかったことは確かなのだから。
「まだ時間はあるし気にしないで」
「そう言ってくれると助かるよ、うーん…でも何処だったかなぁ？」
そう言って彼女は記憶の引き出しを開けて、過去を思い出すように物思いに耽る。
邪魔するのもどうかと思い、少し距離を取り離れる。
…それにしても、今まで瘴気が酷いとか何時ぞやの黒白や人形使いが居ると聞いて避けてたけど。
今居るような瘴気がそれほどない場所もあって、中々いい場所かもしれない。
「うーん…？」
「ねぇルーミア、今度はこっちに行ってみない？」
「ん？思い出せないしいいよー」
今度はと言っても、空も飛ばないで瘴気が酷い所を避けて歩いていたから。
今何処にいるのかも良く判ってないんだけどね。
何処を見ても同じような木々があって、同じ所をぐるぐる回っているような気分にもなる。
…やっぱり、いい場所じゃないかも。
「あれ…？」
「どうしたのリグル？」
変な物がある古い家が視界に入る。
しかし、そこはお店というよりは、古ぼけた家のようだった。
「やっと見つけた…のかな？」
「此処じゃ無いような気がするなぁ…うーんやっぱり違うよ」
「そうなの？でも変な物置いてあるよ？」
「思い出した、人間の里にありそうな家だったよ」
確かに、これは人間の里に無さそうな…何ていうのかな、洋風？　な家だ。
しかし、道案内を頼めるかもしれないと思いつき扉を叩いてみる。
「すいませーん、誰か居ますかー？」
「おぉ…今日のリグルは何時もより積極的だ」

「あのね・・・茶化さないでよ」
「あはは、ごめんごめん」
・・・
・・・・・・
・・・・・・・・・

「誰も居ないみたいだね？」
「そうみたい、留守なのかな・・・？」
　ちょっとした希望を持ったのも束の間、あっと言う間に静寂をだけを置いて何処かへ行ってしまった。
「仕方ない、今度はこっちに行ってみよう」

☆

「暑い・・・」
「暑いね・・・それに眩しい・・・」
　ルーミアと一緒に目を手で覆いながら歩く。
　既に季節は夏から秋に変わっているが、時間が経って急に暑くなってきた。
　朝はちょっと寒いと感じる位涼しかったのに・・・。
「・・・ねぇ？」
「何？　ルーミア」
「ちょっと日陰で休まない？」
　私は大丈夫だけど、ルーミアは元々日光が嫌い・・・
　それなのに朝早くから闇を纏わせないで、今まで連れ回したのは無茶だったかもしれない。
「無理させてごめんね？　休もうか」
「ありがとー」
　そう言って、眩しい光と暑い温度を遮断する闇を展開させる。
　そういえば・・・何でルーミアは、苦手な日光に当たることが判ってるのに道案内を引き受けてくれたのだろう？
　早ければ早い方が良いけど、断られたら夜にしたのにと疑問に思う。
　それとも・・・そんなに私は必死になってお願いをしていたのだろうか・・・？
　自分のやった行動の筈なのに、覚えていない・・・もしそうだったら恥ずかしいから覚えていなくて良かったかもしれない。
「はぁー・・・夕方位になれば私も飛べるし、それまで待ってね？」
「うん、判った」
「出来れば今日中に見つけられるといいんだけどねー」
「そんなに急がなくても良いよ？」
「貴方達・・・何か探しているの？」
「「えっ？」」

★

「なるほど・・・話は判ったわ、香霖堂に行きたいのね？」
　・・・まさか、避けてた人形使いに会う羽目になる何て思ってもいなかった。
　何故かルーミアは懐いてるし・・・。
「これ美味しいねー」
「それは良かったわ、でもそんなに慌てて食べなくてもまだあるからゆっくり食べなさい。」
「判ったー」
「全くもう・・・」
　しかも私の時と違って優しく接してまるでお姉さんみたいだ。
　私の時は、問答無用で襲いかかってきたのに・・・。
「あの時はちょっと急いでいたから、無理矢理通らせて貰ったけど悪かったわ」
「え？　・・・いや、もう過ぎたことなので」
　心を読まれたかと驚いた。
　良く考えてみると、あの時は巫女も居たから異変だったのかもしれない。
　あれ？月も普段とちょっと違ったような気がするようなしないような・・・
「お詫びと言うのも何だけど、これをあげるわ」
　そう言って、私の姿をした人形を放り投げる。
　相手の好意を無下にするのもどうかと思い落とさないようにキャッチする。
　しかし一度しか会ってない筈なのに、そっくりに作られている・・・。
　相手の容姿やその日の出来事を忘れないのかとちょっとした恐怖を感じた。

「リグルいいなぁー」
「貴女にも作るのはいいけど、少し時間掛かるわよ？　貴方達、香霖堂に用があるんじゃなかったの？」
　今日はずっと道に迷って迷子になってて忘れてた…。
　そもそもこの森に来たのも殺虫剤を手に入れるという目的のためだ。
「私は行かなくてもいいんだよ？」
「そうなの？」
「うん、用があるのは私じゃなくてリグルなんだよ」
「じゃあ、貴方のお友達は面倒見ておくからリグルは用を済ませてきたら？」
「…道が判らなくて迷っていたんですけど」
　せめて道が判るならともかく。
　二人で迷うならまだしも、一人ぼっちで迷う何て嫌だ…
「それはさっき聞いたわよ、ほら地図とこの子を貸してあげる」
「いいんですか？　その人形って大事な物じゃ…」
「大事よ？　でも貴女は、他人が大事にしてると判ってる物を故意に壊すようなことはしないでしょ？」
「そんなことはしないですけど…」
「ならいいじゃない、何も問題はないわ」
「…」
「ほら行ってらっしゃい、目的が達成出来るといいわね」
「ありがとうございました…行ってきます」
「貴女と違ってあの子は何というか…常識は有るようだけど自信はないのかしら？」
「そこはリグルの良い所だよ？　自分の目的も相手の事も一纏めに考えて、それでも頑張ろうとするから手助けしたくなるんだよ」
「…まぁ、頑張ってる姿を知ると手助けしたくなるのは判るけどね」
「だから今日も付いてきたんだよ」
「…？　じゃあ何故途中で付いていくのを止めたの？」
「私より役に立つ人が手助けしに現れたから、足手まといはいらないでしょ？」
「それは悪いことをしたかしら？」
「私の人形、期待して待ってるからね」
（終）

〈作者コメント〉
　今月も…と言ってもまだ二回目ですが、何とか完成。前回と同じようにあまり悩まないで好きなように書きました。次回は香霖堂に到着ですがさてどうしようか。…サブタイいらなかったかな？

蟲の願事　～五話～

著者：社　蛍夜

　目を覚ました時、リグルは知らない天井を見ていた。
「ぅ～・・・ん？」
（えーと、たしかあの鈴のと巫女とが争ってて、んで私飛び出して・・・そういえば何で飛び出したんだ？　私）
　等と考えている頃には、頭は冴えていて周りを見渡していた。
（え、と・・・・・ここ何処だ）
　そう思い、寝ていた布団から体を起こした時。
「あら？　起きたの」
「ひぇぇぇっ！」
　バッと後ろを向いたリグルの目の前には『八意 永琳』が本を読んでいた。
「もう少し寝ててもいいのよ」
　そう言うと頭を指差した。リグルはそれに倣い頭を触り、包帯がしてある事に気付いた。
　何かしてもらったのか、そう思い永琳の方をもう一度見たときには読んでいた本をパタン、と閉じると立ちあがり、リグルの横を通り扉を開けた。すると、
「あっ、みんな」
　どさどさっ、と倒れこむようにチルノ達が部屋に傾れこんできた。それを確認すると、永琳は部屋を出た。
　一番下になり苦しそうにしていたチルノが、リグルの顔を見た途端動きが止まり、そして表情がだんだんと緩み
「リグ「リグル～～！！」
　上に乗っていたミスティアが飛んできた。
「あっミスティ、うわっ、ちょ、まって！」
「リグルー！　良かったよー！」
「あのみすちーおも・・・ひぇっ、えっ、あっ、ちょ、みすち、ひぇぇっ」
　ミスティアの羽で様子が窺えない。這い出てきたチルノが後ろからミスティアをひっぺがえす。
「何すんのよ！」
「何やってんのよ！」
「何って・・・感動の再会？」
「それはあたいがやろうt・・・いやそうじゃなくて、今起きたばかりの病人でしょ！」
　態度を改めるどころか、少し誇らしげに
「感動のあまり勢いでやってしまったのよ！」
　すると、その答えを聞いたチルノが、何かを思いついたかの様に目を光らす。
「勢いなら何やってもいいの！？」
「勢いなんだからしかたな・・・何やってんの！」
　チルノがリグルに飛びついていた。さっきのミスティアの事があったからか、リグルは動けず「グエッ」と飛び込んできたチルノを受け止める。
「勢いでリグルに飛びついちゃった」
「ぐ･･･チルノ、お腹に当たっ･･･ひぇぇっ！」
「チルノ一人に良い目にあわせてたまるかー！」

「さっき十分楽しんだから今度はあたいの番ー！」
「二人ともやめ・・・ひえっ、あっ、ふあっ、にぁっ、ひあぁぁっ」
　再発、今度は二人もいるため様子が窺えない。すると、急に三人を暗闇が包む。
「っ！ルーミア！？」
「ぶっ」「に゛ぁっ」
　暗闇が消えた時、上に乗ってた二人は横で伸びており、代わりにルーミアが乗っていた。
「あぁ、ありがとうルーミ・・・」
　起き上ろうとしたリグルは違和感を感じる。起きようとするが肩のあたりに何か押さえているモノが・・・そう、手のような。汗が垂れる。
「あの、ルーミア・・・さん？」
　震える声で尋ねる。目が怯えている。
「リグルって・・・美味しそうだよねー」
　こちらは目が逝ってらっしゃる。
「ひぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」
「リグルの悲鳴！」
　起き上る二人。少し鼻血が出ている。
　二人が飛び込み三人で乱戦になるかと思ったその時
「いーかげんにしなさいっ！」
　大妖精の声が響く。今の今まで出てこなかった彼女だが、チルノが這い出ようとした時の肘が当たり、少しの間寝ていたようだ。
「大ちゃん！」
　ついにまともな助けが来たと思い喜ぶリグル。
「チルノちゃんは私のだっ！　このドロボウ猫ー！！」
（・・・えー？）
　リグルが目を丸くする。大ちゃんまで・・・ドロボウ猫扱い。あ、涙。
「ちっ！　さっきの肘打ちが弱かったか！あたいはリグルを愛してるんだ！！」
「チルノちゃん！　目を覚ましなさい！そんなのより私のがかわいいでしょ！！」
「リグルへの暴言は許さん！　リグルのかわいさを見たけりゃ、その鳥目を直してからもう一度見ることね！！」
「リグルちゃんは私が食べるんだよ！」
（これは夢、これは夢、これは・・・）
　現実逃避しているリグルを横目に、四人がぶつかろうとした時、扉の向こうから何かが飛んできた。
「にゃっ」「ふぇっ」「んがっ」「のっ」
　四人が飛び、壁にぶつかる。涙目で震えているリグルが扉の方を見ると、廊下に霊夢が立っていた。
「霊夢！？　・・・までみんなとおなじじゃ」
　助けが来た・・・が、また同じ事の繰り返しでは？　と思い後半苦い表情になった。が答えは望んでいたものだった。
「何？　その方が良かったの？」
「いえ全くそんな事は思っていません。ありがとうございます」
「はぁ、まいいけど。んで、どうよ調子」
　言いながらリグルの横に座る霊夢。巫女らしくしっかりと正座をした。
「あ、はい。結構良くなりました・・・ってみんなは大丈夫なの？」
「大丈夫よ。ただの『夢想封印』だから」
　何故かリグルの顔を汗が垂れる。
「あはは・・・そうですか」
（みんな直撃だった・・・あと二時間は寝てるかな）
　そんな事を思っていたら、今度は永琳が戻ってきた。先程の四人が飛んだ際、壁に大きめな穴があいた。その穴を見て
「・・・なんかすごい事になってるわね、霊夢」
「目の錯覚よ。どっかの兎が悪戯してるのね」
　しれっと、知らぬ存ぜぬを通す霊夢。ふぅ、と溜息をつくと永琳は霊夢の横に座る。そしてリグルの目を見据えて、優しく言い出す。
「さてと、それじゃあなたに今までの経緯を話しましょうか」
「あ、お願いします」

※※※

　リグルが倒れた直後、リグル宅前。
「そうねぇ。何ならもう一つ恩返ししておきましょうか」
　霊夢のその言葉にチルノが反応する。
「なによ！　いつもは妖怪退治とか言ってる

くせ・・・」
「ちょっとそこの夜雀、リグル持ってくれる」
「ミスティアだっ！」
「人の話聞けーッ！」
「っとに、五月蝿いわね。どうせそのリグルってのも行った方がいいとこよ。おとなしくついてきなさい」
　むぐ、と黙るチルノ。倒れている仲間の方を優先したのだろう。それを確認した霊夢は飛ぶ。チルノ達もおとなしくついていき、そして着いた場所が・・・
「竹林・・・？」
「バカね、用があるのはこの奥よ」
「っな！？」
　ルーミアが暴れだしそうなチルノを押さえているうちに、大妖精が聞く。
「ここって迷いの竹林でしたよね。この奥って確か・・・」
「医者、用事もあった事だしね」
「用事・・・って何でしょうか？」
　それを聞くと、ミスティアに背負われたリグルを指差してこういった。
「その病気みたいなのの治療法を、知りたくてね。人里の人たちはこんなとこには来たがらないから丁度よかったわ」
　何か不穏な空気を感じ、聞いてみる大妖精。
「・・・丁度いいって何ですか」
「モルモット」
　オブラートに包もうとしない霊夢。
「「っな゛！！！？」」
「動物？」
「⑨」
「くぁwせdrftgyふじこlp；；！！！」
　必死に抑えるチルノを抑えるルーミア。大妖精とミスティアは、霊夢に対して物凄い視線をぶつけている。それを見たからか付け足す霊夢。
「腕は確かだし変な事は無いと思うわよ。それに人里からの依頼でもあるしね」
　そして、永遠亭へたどり着いた一行は、リグルを診てもらい起きるのを待っていた。

※※※

「んで、あいつらが『喉乾いた』とかいってすぐ近くにあった酒を飲んだりしてたわね。水とでも思ったのかしら」
「私たちの飲む分無くなってしまったのよね」
「・・・さっきのはそれのせいか」
　飲む分無くなった。どれくらい飲んだんだだ、と考える間もなく額に手を当てるリグル。頭の痛い、考える人のようだ。
「どしたの？　まだ頭痛いとか」
「いや、大丈夫」
「ふぅん・・・まぁ起きたからには喋ってもらうわよ」
「何をですか？」
「フードの奴の事よ。蟲操ってたしあんたと関わりあると思ったんだけど・・・」
「残念ですね、むしろ私が被害者ですよ」
「っよねぇ、知り合いなら何でこんな事になってんだってなるしね」
　振り出しに戻ったせいか、疲れがどっと出たようで後ろに倒れこみそのまま横になる霊夢。
「っとーに知らないのぉ」
　横になりながらなせいか、少しだらしない喋り方だ。
「んー・・・蟲達が何されてたかくらいだね」
「蟲達が何されて・・・・・・それどゆこと？」
　起き上り真剣にリグルを見る霊夢。
「蟲達は『自分達の意思で』私に向ってきてたわけでない、そう言うのね」
　その言葉に頷くリグル。
「まだ恐らくだけど・・・蟲達は『あの鈴の音であなたを襲うようにされていた』ように思うんだ」
「何故？」
「蟲達の声だよ。鈴の音が鳴るまでは何とも無かったのですが、鳴った途端あなたにとてつもない怒りを・・・」
「怒らせる能力・・・？　それだけなら見境なく攻撃しそうよね。それに私たちに影響が・・・蟲だけ？」
「そうね・・・リグル、あなたもその妖怪に狙われていたのよね。あなたに変化は無いの？」

「え?え、っと・・・」
　永琳の言葉に考え込むリグル。そして
「なんか苛立つ・・・かな」
　その言葉を聞き、さらに質問する永琳。
「何に対して?」
「人里」
　さらっと出た答えに、言った本人は目を丸め驚く。二人もその答えに驚き、そして納得したように話を続ける。
「霊夢」
「えぇ、コレね。あいつが狙ってたのは」
「・・・えっ? えぇっ!? 何ですか二人して!」
「分かったのよ。ま、大体ですが」
「一体何が!?」
「あいつの目的と・・・大まかな能力ね」
　そして、霊夢は説明した。
　奴の能力が、怒りの感情を操るであろう事。私を襲うようになったのは、私個人への怒りを作ったであろう事だと。
　そして、その能力であんたに人里を恨んでもらおうとしてる事。あんたが一人暴走して蟲達を従え、あんたに人里を襲ってもらおうとしている事。
「だけど全て仮定。あてにならないかもね」
「とは言っても、ここまで情報があるのだからね。全て外れ、なんて事は無いでしょう」
「そうね。大体の答えは出たのだし、一度里の方へ帰るわ」
　霊夢は席を立ち、出口に向かう。
「えぇ。戻ってくる時にはお金、持ってきてね」
「何のよ」
「この子の」リグルを指指す。
「・・・・・・」
　眉根を寄せて、ジトッとした目で睨む霊夢。その目に対し、気押されるリグル。そして
「嫌」
「な!?」
「でも、連れて来たのはあなたじゃない」
「診察受けるって言ったのはこいつ等よ」
「へっ、屁理屈!」
　守銭奴状態の霊夢には何を言っても意味が無く、切り返しはとてつもない爆弾を抱えている。
「何よ! 少なくとも私は一銭も出さないわよ!あんたが体で払いなさい!!」
「体で!?」
「ひぇっ!?」
　言葉に反応しリグルを見る永琳。その視線に驚き、ビビってしまうリグル。・・・変な意味ではなく、『妖怪の実験ざいry・・・モルモット』として見たはず。多分。
「ちょっ、霊m・・・っていない!?」
　リグルが振り向いたときには霊夢は部屋におらず、戸が開きっぱなしになっていた。
「な・・・」んて早い、と言おうとした時。
「そうね、こんな事滅多に無いしあんなことやこんなことで料金を・・・・・・」
　ブツブツと聞こえる声。
「ひぃっ!」
　その声に怯え、うっすら涙目になったリグルが、振り向いたら食われるかもしれない、というような恐怖と戦いながら、ゆっくり振り向き、そして

（終）

〈作者コメント〉
　今までｓｓ書くのに一日かけてなかった事に気付いた。
　今回は今までの二倍あるんじゃね?な、長さです。かけた時間も二倍、二日です・・・結局みじｋ（
　ギャグ要素があったからフィーバーしてしまったのかな・・・自分そんな奴だったのか。それはさておき、今回から誰かさんの能力公開ですねー・・・うん、その場しのぎしすぎて辻褄合わせるの苦労したなんて言わずともですよ。
　実は霊夢の考えが微妙に違ってたりするんですよねー、とか言ったり。まぁ追々説明していきますが。
　続きを考えながら書くなんて出来ない、計画性の無い自分にはｓｓは厳しかったかなー・・・と最近思っています。
　そんなですが、皆様の生温かい目が向けられるようまだまだ頑張ります。

Trick or Treat?

11月号テーマ

ハロウィン特集

『Nightbug Trick』　悠木玲二

「bug's or Trick」と可愛い顔して鬼のような選択を強いるリグルを妄想して描さました（笑）

大人しくお菓子を渡すか、敢えて蟲地獄を味わうかはあなたにお任せ！

Hallowe'en

『 Trick 'r Treat ! 』 ADDA

リグルの触角は使われるところが多いようです。Happy Halloween !

『 ミイラ蛍 』 mimidori

■「実は虫が強かった時代もリグルが王様務めてたけど、力も頭も弱くなってそんな昔のことは忘れちゃってる」みたいなのもありじゃないかしら。そして強いと大きい、色々。
■ホラー特集の表紙と被りすぎ？そんな昔のことは忘れちゃってるみたいなのも……ごめんなさい。

『 さきゅばすりぐるん 』　くうりん

ハロウィン→コスプレ→サキュバス　というとても安易な発想で、ちょっとリグルに着てもらいました。
今回はコスプレネタが多いのかな・・・？

『お菓子くれないとイタズラしちゃうぞー』　くらげん

１０月１３日、ネタに悩んでいたくらげんは偶然、某mixiにて東さんのパチュリグは見た。描くしかないと思った。１０月１４日、寝オチした。１０月１５日、晩御飯はすき焼きだった。原稿はきっと間に合わないと思った。

『 魔女っ子リグル？ 』　やにたま

リグル「『この格好ならば、お菓子がたくさん貰えるウサ！』、って言われたんだけど、何か間違ってるような・・・」 みすちー「お菓子いらないから悪戯させてって感じだよね、・・・こっちが（じゅるり）」リグル「！！？」　・・・最初はリグルに普通の魔女コスさせるつもりが、つい欲望が・・・（爆
彼女をつい発育よく描いてしまうのは悪い癖というか最早不治の病。

『 大漁大漁♪ 』　貴キ

お菓子を貰いまくった後感想を述べつつ帰路に着く途中の4人です。
リグル、そんな格好してるから男の子って言われるのよ

『 バカルテット in かりすま 』　蛍光流動

「この格好ならお菓子もらい放題ね！」「「まさか本人出てこないよね・・・」」

『 Happy Halloween. 』 緑
お菓子あげるからイタズラさせてください by草葉さん

『 無題 』　亞Q

はりきって特集に参加しようと思ったのはいいものの、結局ハロウィンらしさはかぼちゃと帽子くらい。
しかしリグルがtrick or treat!なんて元気よく言ってきた日にはこちらがいたずらしたくなりますよね、きっと。

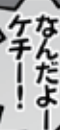
使用したかぼちゃはおいしくいただきました

リグると！
かぼちゃぱんつ

魔理沙ー！
トリックオアトリトン！
トリート
あー？お前達にあげるおかしはないぜ？

さーって帰った帰った
なんだよーケチー！
ちょ、ルーミア、何してるの！？

ゴオオオオオオオオオ

もぐもぐ

描いたひと：ひどぅん

蟲の手帖

描いた人 HOUSE

11月号 2009 NOVEMBER

この作品には虫描写や写真が含まれています。

魔ー理ー沙ーー トリック オア トリーー

■前回のあらすじ
プリズムリバーの三女が新しい音ネタで新曲を披露するも鳴かず飛ばずだったらしい。
ー…雌蛍だけに（うまい。）

ぬぉうっ

それで何だ？ 今回は人を驚かす蟲の特集か？

うんにゃ ハロウィンらしく死霊の特集

ほう 穏やかじゃないぜ

聞いたところハロウィンってお盆みたいなものなんでしょ

カボチャは牛？馬？…車？

それでかねてからやりたいと思っていた蛾の特集を…！

―…と考えたのよ

蝶や蛾と人の魂は重ねてイメージしやすいらしいし

…ああ 幽々子のスペルとかな

良い思い出がないぜ アレは

でもやめました

は？

ふふっ

迷子の人間から面白い話を聞いたんだ

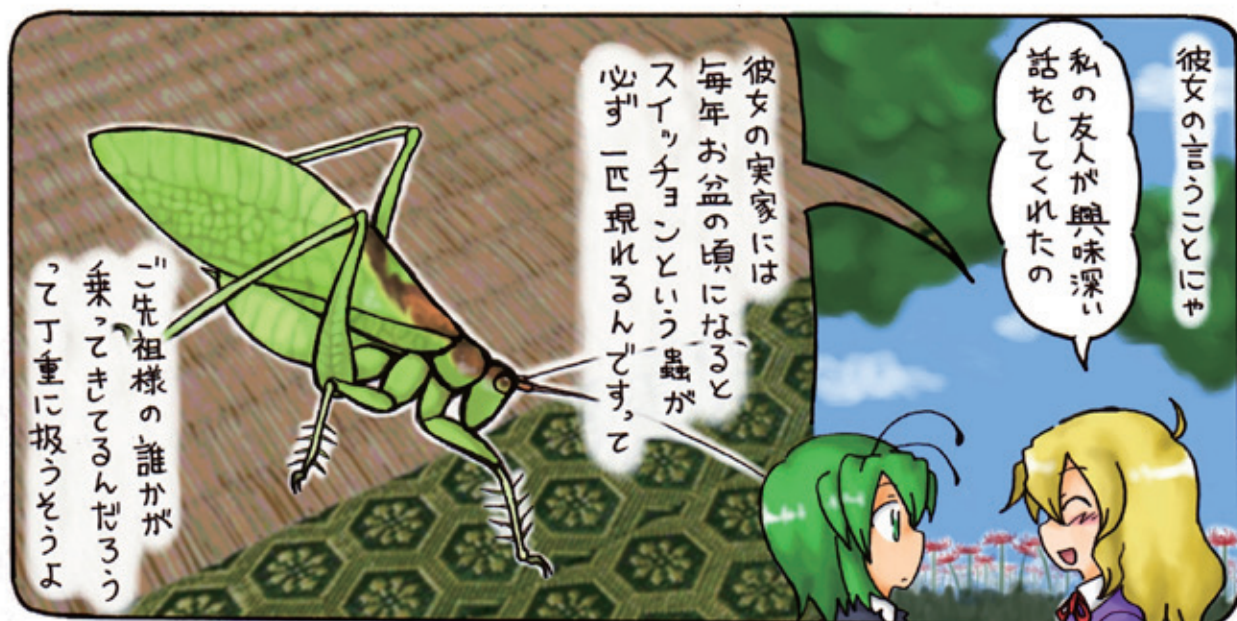
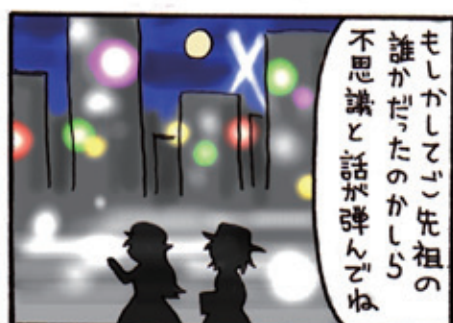
荒れ野でボサっとしてたからさ 声をかけてみたら話が弾んじゃって

ナンパ自慢か？

水差すな。

彼女の言うことにゃ
私の友人が興味深い話をしてくれたの
彼女の実家には毎年お盆の頃になるとスイッチョンという蟲が必ず一匹現れるんですって
ご先祖様の誰かが乗ってきてるんだろうって丁重に扱うそうよ

入れ物なのかな
良くも
悪くも

巨大蛍の夢?
ええ

11月号テーマ … ハロウィン特集
突撃!! 隣のハロウィン
貴女の家にはどんなお菓子が？
お菓子を頂戴するため魔女の仮装に身を包み魔女のお宅を訪問しました
トリ…
オア
トリック
いたずらしてくれなきゃ
いたずらしちゃうぞ
・・・今北産業
※某所でよく使われる言葉 三行にて説明を求める
きのこ菓子食わせたらトリップ
把握 自業自得じゃない 末永くお幸せに
その格好からしてお前ら菓子貰いに来たんだろ？余ったきのこ菓子いるか？
ノーサンキュー
描いた⑨：言示弄

とりっく
おぁ
とりぃと?

楽屋ウラ的何か。

描いた人
草加あおい

10月最終日の悪夢。

あんらっきー すたぁ。
開けないと破壊してでも入るわよ？
待っててっ！今開けますっ！！
いくでガンス
ガチャッ
ふんがー
サッ
え、えと…
ま、真面目に始めなさいよ…？
ごくり…
かーいかいかい。
…わかってないわね～…… 今日はハロウィン
はぁ…
つまりモンスターの日よ？
更にこの面子。
吸血鬼。
満月で変身。
人の作りしもノ。
どう考えても元ネタのほうじゃない
うるさ～いって。
…そのセリフも充分死亡フラグが立つんですけど…

ねーんりき しゅーちゅー。

ハロウィン… あぁ、チルノが言ってた お菓子がどうのって…
えと、ごめんなさい お菓子は用意 してないんです…

ハゲヅラも用意してあります。

ここでネタ切れ（死）

リグルとチルノ
神社へ行く

描いた奴：キッカ

巫女の異変？

なんだこれ

行ってみる

使えるものは何でも使う

おしまい

Trick

化猫

可愛らしい
お化けさんたちね
おかし
化猫

魔女の元締めだよ全部置いてきな

化猫

Treat

バラ
バラ

あらあら
こぼしちゃったワ

ゾク
ゾク

二恋択一

著者：くろと

　秋が濃くなるに連れて、周囲の環境は慌しくなっていた。というのも白玉楼主催のハロウィンパーティが決行されるからだ。
「お菓子は持参してね。不参加だった場合は、妖夢が斬るからね」
　先手で拒否権が奪うのが亡霊少女のやり方なのか、いずれにせよ反論すらさせない。
「ちなみに私は和菓子が好きだからね～」
　手を一杯に振りながら、白玉楼の主は従者と一緒に嵐のように去っていく。
　それが先週終わりに起きた出来事である。
　ハロウィンパーティ当日。開放された白玉楼の庭園にはかなりの人数が集っていた。
　だが、リグルを含めて何人か足りない。
　それを亡霊少女は不満にしていた。
「妖夢」
　彼女は傍に控える少女に話しかける。
「お菓子を取ってきて頂戴」
　それだけで良かった。
　主から役割を頂いた従者は「御意」と一言を返し、次の瞬間には消えていた。
　獲物を刈り取るのは時間の問題だろう。と判断し、亡霊少女は次の行動に移る。
　扇子を開いて行う、気の抜けた宣言。
「それじゃ、ハロウィンかいしー！」
　亡霊少女の開いた扇子から鮮やかな蝶が宙に解き放たれた。
　歴史に残る菓子略奪が始まったのだ。

□

　月に掛かった叢雲が、世界を月光と闇夜に二分している。その下で動くものは二人居た。
　一人は月光に照らされて、深緑のような色をした髪の毛が映えるリグル・ナイトバグ。
　もう一人は夜の陰影に潜み、遠目では姿形が分からない少女だ。
（どうしよう……）
　そして大木の陰で妖夢は惑っていた。
『どうしてなの！』
　澄み切った夜空にソプラノトーンが響く。
『アイツじゃなくて……私を、私を好きになってよ！』
　それは告白、まさにその瞬間だった。
（まさかこんな事になってるなんて……）
　妖夢は溜め息を吐く。
　この緊迫したシチュエーションに割って入り、あまつ菓子を奪うなど出来るはずもなかった。
『……いまさら、どうして！』
　リグルも強い言葉を返してきた。
（こ、これは失恋するのか？）
　正直、主の世話と庭師見習いの仕事に忙しい妖夢には恋愛など縁遠く、予想が出来ない。
『いつも応援してくれてたのに……、あれはウソだったの？』
　リグルの言葉が鋭い針のように飛んだ。
『頑張れっていうのはウソだったの！』
『違う！　違うよ……。最初は、最初は私も知らなかった。でも、リグルが告白するって言った時、とても、とても切なくなったの！　だから……！』
　泣き声が混じってくる。
（なんというか、複雑だ）
　妖夢はそう考える。
　少女はリグルを応援していた。けれど、リグルが告白を決意した時に、本当の気持ちに気付いたのだろう。
　二人の間に気まずい沈黙が降りる。妖夢の心にも気まずい緊迫が走る。
『ごめん……』

リグルが開口した。それは拒否の返答だ。
少女と妖夢が合わせたようにドキッとする。
リグルはとても優しい言の葉で。
『さっきから……、初めて見た、あの人の笑顔が頭に思い浮かぶんだ』
『……いや』
いや、という一言に呼応して、妖夢の心臓が激しく脈打ち始める。
『私は、私が好きなのは！』
『聞きたくない！』
風が、吹いた。
それは突風ではなく、些細な微風。
しかし、それに乗じて行動した者が一人いる。
（なっ！）
妖夢はその光景を目に焼き付けた。
少女が、風に乗って、リグルの続く言葉を自分の口で封じたのを。
（き、きききキスっ！）
妖夢の病的なほどに青白いかんばせが、焚き火に薪をくべたように紅潮した。
視線は二人に釘付けで、思考が止まりかけた。
いや、止まった。
……大丈夫、私には妖夢が居るでしょう？
停止した思考が最初に思い出したのは、覆い被さるように抱擁してくる主の姿と頭を撫でるような声だった。
（……あれ？）
先ほどまでの動揺が嘘のように、思考が透き通った。
どうして此処に居るのか、分からなくなる。
（幽々子様は何処に？）
見当たらない主を捜そうと、体が勝手に動き出す。
木陰から姿を出した。
『……あ』
キスで動けなかった二人が妖夢に気付いた。
「……！」
妖夢は一気に状況を思い出し、石のように硬直した。
まさか第三者が潜んでいるとは露にも思ってもいなかった二人が、慌てて互いの距離を離す。
（気まずい！　非常に気まずい！）
妖夢はというと、逃げ出したい感情を抑えるのに必死だった。
「あの、妖夢……？　そんなところで何、してるの？」
リグルが平静を保ちつつ、切り出した。
「え、いや、その」
その言葉に妖夢はしどろもどろになる。
しかし、日頃欠かさぬ鍛錬の賜物か、焦る感情とは別に理性が働いた。
「参加者が足りなかったら捜しに来たんだ。そうしたら二人が、その、……邪魔をした」
後は言うまでもなく伝わるだろう。
とにかく二人から遠ざかろうとして、無理だと気付いた。
今まで感じたことのない、凄まじい怒気を察したからだ。
「……せいだ」
少女が密かに呟いていた。
妖夢の背中に、冷や汗が流れる。
決して後ろを振り返りたくなかった。
しかし、振り向いた。
「あんたが……ハロウィンなんて！」
振り向かなければ、泣きじゃくる少女に殺されていたからだ。

□

「おそーい！　今までなにを！　……って、どうしたのその傷？」
辛うじて白玉楼に帰ったとき、ハロウィンパーティは終幕していた。
参加者達が地に伏し、積み上げられていたのは言うまでもない。
「幽々子様……世の中って難しいですよね」
妖夢は傷だらけだった。
「なんだか知らないけど、色々あったみたいね」
何も知らない主は能天気に「あっ」と思い出したように。

「妖夢、ハロウィンの合言葉ってなんだったっけ？」
「え？」
　妖夢は若干戸惑い、すぐにハッと思い出して答える。
「トリックオアトリートですよ」
　目の前に手のひら大の菓子折りがぶら下がった。その先には主の笑顔がある。
「……え？」
「はい。これあげるから悪戯しちゃダメよ？」
　菓子折りを受け取ると、主は満足したように白玉楼の中に入った。
　呆気に取られていた妖夢は、主が見えなくなってから小さく呟いた。
「……ありがとうございます」
　言葉とは裏腹に、何か、心の中に、もやもやする感情に妖夢は気付いた。
「これって……？」
　自分が生み出したにも関わらず、自分には分からない感情だった。だが、それもすぐに気にならなくなる。
　背後に気配を感じたからだ。
「誰だっ！」
　腰に提げた鞘と柄に手を掛け、膝を落としながら振り向けば、
「……リグル？」
　居たのはリグルだった。
　リグルは開口一番に謝罪してきた。
「さっきはごめん。巻き込んじゃって」
「気にしなくていい。……私のほうこそ。すまない」
「ううん。それよりも……」
　リグルは一度、そっぽを向いて、すぐに眼差しを戻してきた。
「トリックオアトリート」
　それは、お菓子か悪戯か。を選択させる一言。妖夢は一瞬、手に持っていた菓子折りに視線を落とす。
（うん）
　刹那に下す。これは渡せない。と。
「悪いが他を——っ」
　二の句が繋げなかった。
（へ？）
　リグルにキスされていた。

　月が沈んで庭園に陰りが帯びていく。しかし、いまだ月光が届く場所で、リグルと妖夢の時間は止まっていた。
「……！」
　停止した時間は突然として動き出した。
　妖夢がリグルを手で突き飛ばしたのである。突き飛ばされたリグルは、そのまま陰りの中にまで下がった。
　どちらも言葉を交わさない。交わそうとしない。
「妖夢」
　先に口を開いたのはリグルだった。
「貴方が、好き」
　夜に震えた、真っ白な声。それに比例するように、妖夢の心は震えていた。
（今、何されたの？）
　妖夢の心持ちを無視して、リグルの怯えるような声が続く。
「また、イタズラしに、くるから、絶対」
　それだけを言い残し、リグルの気配が闇夜に掻き消えた。
（……幽々子さま）
　感情が発露し、風船のように膨れ上がる。
（幽々子さまぁ……！）
　それは体の震えになって外へと漏れた。
「……あ」
　手が震えて、菓子折りを落とした。
　拾おうとして、体を曲げれば、

　涙が一筋、頬から零れ落ちた。

（終）

〈作者コメント〉
　気の利いたタイトルも台詞回しも思い浮かびませんでした

トリックトリート

著者：壁々

「トリック・オア・トリート！」
　普段は夜になると里から消える子供の声も、この日は途絶えない。1年に一度の、妖怪が主役となるお祭り。子供が妖怪に扮してお菓子を家々にもらいに行く―起源や意味は知らずとも、これから冬も本格化しようというこの時期に、楽しいイベントがあるというだけで里の人間としては十分だった。
　今日はハロウィン。それは、妖怪が大手を振って人間と接触できる日でもある。

「さぁ、あらかた普通にお菓子は集まったし、今日のメインイベントいこう！」
「予定だと…えっと、山の巫女と森の道具屋と紅白巫女よね。」
「普通にお菓子をくれるのか、それとも拒否するかは知らないけど―」
「どちらにしても私たちに損はない！」

　今まで普通に里の子供にまじってお菓子を集めていた、いつもの妖怪４人組―チルノ、リグル、ミスティア、ルーミア―は、戦利品をわけあいつつ、喜々としていた。これほど自分たちに有利にできている日も珍しいものだと、皆がすでに勝利を確信している。
「それじゃぁいくわよっ！まずは山の巫女！」
「せーのっ」
『トリック・オア・トリート！！』
　声をそろえて高らかに宣言したあと、４人は星明かりの下で妖怪の山に向かって飛び立った。

トリックトリート

「意外とはやっちゃってますね。ハロウィン。」
「幻想郷の住人はお祭り好きだね。…やはりいいねぇ、人が楽しそうに騒ぐ姿を見るのは。」
「神とは直接関与しないお祭りだけど…」
　守屋神社。いつもより明るい里の明かりをみつつ、早苗達は静かに過ごしていた。おおよそ普通の人間が来るような場所ではないため、このお祭りとは無縁である。もっとも、事の始まりは幻想郷に来たばかりの早苗が、ぽそりと「これじゃ毎日ハロウィンみたいなもんですね」と人里で言ったことからなのだが。起源や意味があいまいなのは、ただ単純に早苗の知識も曖昧だったからにすぎない。
「そうだ早苗。妖怪に扮した人間はこないだろうけど、ガキくさい妖怪が来る可能性は十分にあるんだよ？　そこらへんの対策はしてあるの？」
「…うーん、棚に埋まってる食べないお菓子でもてきとーにあげちゃおうかなって…」
「ガキくさい…ねぇ…」
「なんか言いたいならはっきり言ってみな、神奈子」
「あんたが言えることとか？」
「はっきり言ってきたねぇ、大人ぶって。見

た目と相まってそれらしく聞こえるよ。」
「上等だガキ蛙。湖まで顔貸しな。」
「調子乗るんじゃないよ、この老蛇。」
「あの、神奈子様、諏訪子様？　少しおちつかれたらーって…」
　早苗が声をかけようとした時にはすでに二神の姿はなく、かわりに湖の方から激しい霊力のぶつかりあう気配が伝わってきた。
「…もー…お二人とも早すぎるんですよ…。」
　やれやれ、といった顔を隠そうともせずに早苗は二柱の去った膳を片づけようと腰を上げた時に

『トリック・オア・トリート！』
　空から声がかかった。早苗が見上げる間もなく、４人の妖怪が境内に降り立ってきた。
「…こんばんは、いい月ですね。」
「今日新月なんだけど。」
「ごまかすにももっといいセリフあると思うよー。」
「まぁ、ごまかそうったってそうはいかないんだけどね！」
「そうですね…というか、天狗の警戒網をよく抜けてこれましたね。」
「天狗はなんか、今日にかぎっては１度だけ通してあげましょう、って。」
「（ネタにするつもりなのかしら…？）うーん、しかし困りましたね。正直来る人がいるとは思ってなかったもので…かといって悪戯されてこれ以上私の仕事が増えるのも困りますから…ちょっと湖のほうでも見て待っててください。」
　湖での弾幕戦がちょうど終わったころに早苗は帰ってきた。
「おまたせしました。まず、妖精である貴女にはこれ。アメです。」
「やった！」喜々として袋を開けたチルノだが、中身を見た瞬間、表情が怪訝なものに変わった。
「…何これ、黒いんだけど？」
「コーヒー味です。うちにあるアメの中では私にとって一番いらないものでしたので。」
「コーヒーって…妖精は苦いのが苦手なの！　そんなことも知らないの！？　ていうかいらないもん渡すな！」
「知らないです。さて、次は…虫の妖怪である貴女にはこれ。ゼリーというものです。」
「…ゼリー？」
「ええ、外の世界でカブトムシを飼う時に餌とするためのものです。きっと口に合うと」
「なめんなー！」怒号とともにリグルは全力でゼリーを蹴り飛ばした。
「ああ、ポイ捨てはよくないですよ？　…さてと、鳥の妖怪のである貴女にはこれ。モチです。」
「…モチ？　お菓子…とは違う気がするんだけど？　まぁいいや…」
「じゃあはい。」と、早苗がミスティアに手渡したモチはべっとりとミスティアの手に張り付いてきた。あわてて取ろうとしたミスティアだが、取ろうとした手にも張り付き、取れる気配がないことに気づいた時にはすでに時遅しだった。
「トリモチじゃん！　お菓子どころか食べ物ですらないじゃん！」
「お菓子であることにこだわらない貴女のせいです。」
「何その言い逃れ！？」
「さて、と…闇の妖怪である貴女ですが…ああ、そんな身構えないでください。流石にネタが思いつかなかったんですよ。」
「…そーなのかー？」
「と、いうわけで…貴女は聞いた話だと紅いものが好きだという話でしたので、これを。」
「…？」
　ルーミアに手渡された袋は黒くて、体積の割に軽いものだった。ところどころに紅い文字が書かれている。
「スナック菓子というもので、その袋の中にサクサクした紅いお菓子がはいってます。４人でわけて食べれる量でしょうから…その袋でひとつ。多分、幻想郷ではめったに食べれない部類のお菓子でしょうから、普通のお菓子もらうよりは価値があると思いますけど。」
「…うーん、まぁ…いいかな？」
「そうだね、普通のお菓子はある程度あるし…」
「からかわれてたのはしゃくだけど…」

「じゃあ、これで山の巫女は終わりね！　次行くわよー！」
「せーのっ」
『トリック・オア・トリート！』

　４人が飛び去った後、膳を片づけ、縁側でお茶を淹れてぼんやりしている早苗の脇に一陣の風が吹いた。
「こんにちは、文々。新聞です。」
「貴女の差し金ですか？」
「あの４人のことですか。そう考えてくださっても結構です。」
「ネタになりそうですか？」
「どうでしょうね。これから次第な感じは否めないですが…ところで早苗さん、貴女はどんなお菓子を渡したんですか？」
「外の世界で一世を風靡したお菓子です。私も食べたことがありますが…」
「が？」
「辛いですね。いやまぁ、そういう謳い文句で出しているお菓子なんですけど、人によっては辛いを超えて痛いに到達するんですよ。」
「お菓子なのに辛いとはまた斬新ですね。それはともかく、そういうお菓子ですか。つまり私はあの４人を追えばいいんですね？」
「そうですね。いい記事になると思います。それでは頑張ってください。」
「取材にご協力いただきありがとうございました。」

　また再び一陣の風が吹き、あとには早苗が残された。お茶を飲みながら星空をみあげる早苗の耳に断末魔のような悲鳴が聞こえたような気がした。

「…うう、舌がまだ痛いよ…」
「あの巫女めー…今度あったらただじゃおけない…」
「そーなのだー…」
「…とにかく！気を取り直して！次はここ！」
　山から下りて、森に着いたところで４人は早苗からもらったお菓子をあけて口にいれた。その結果、まさかの辛い食べ物、しかも尋常でない辛さが４人を襲い、しばらく４人して七転八倒し、あわてて水を飲むために沢に行くとともに、人里での戦利品のお菓子でどうにか調和したのである。
　そして現在、いまだ口にわずかに残る辛さに愚痴をこぼしつつも４人は香霖堂に到着したのである。
「じゃあいくよ！トリック・オア・トリート！って…アレ？」
　チルノが勢いよくドアを開け、お決まりのセリフを大声で言ってみたものの、店内は真っ暗だった。
「いないのかな？」
「いつもいるのにねー。」
「仕方ないわね、そこらへんにある珍しそうなものもらって帰ろうか。」
「やめてくれ、それは泥棒という行為だよ。」
　店の商品の危機となって流石に店主が現れた。と同時に店内は明かりで急に満たされる。目が慣れるとそこには見慣れた店主の姿があった。
「ほらいた。隠れてやりすごそうって腹だったんでしょ。」
「いつもこの店に来るとろくなことをしていかない妖怪が寄り集まってお菓子をせびりに来たね。お菓子をあげなきゃ悪戯するぞ、というセリフは、いつも悪戯してない場合にしか言えないと思うんだが？」
「小難しいこと言ってごまかそうったってそうはいかないよ！」
「いや、チルノ…今のは簡単だったよ。それはそうと…どっちなの？」
「…まぁ、僕だって祭りのイベントを口先三寸で否定しようとは思わない。それに、リグル…だったか、君は。」
「ん？」
「君は何度か礼儀正しく来店してくれていた気がするんだよね。商品を買いにではなく売りにだが…蟲の知らせサービスだったっけ？あれはどうだった？」
「好評でしたよ。リピーターはいませんでしたけど。」
「だろうね。まぁともかく、君には普通にお菓子をあげてもいい。丁度、外の世界から流れてきたお菓子があるんだ。」

「…外の世界から…？」
「また辛いものね！　だまそうったってそうはいかないんだからー！」
「また、という事情は僕の知るところではないけど、辛いものではないよ。チョコレートというお菓子だ。おそらく、稗田の家あたりではそこそこ見かけることのできるお菓子だと思う。」
「…あ、チョコレートなら私知ってる。」
「ミスティアが？」
「鰻屋に来た人が前にくれたことあるよ。すごい甘くておいしかった。」
「へー…ならそれでいいかな。」
「じゃあ僕からのハロウィンはこのチョコでいいかな。まぁ、そんな一人で大量に食べれるものではないし、この1枚で十分だろう。」
「…ねーミスチー、これ、黒いよ？」
「いや…前もらったのも黒かったし。それでも甘かったから大丈夫だと思うけど？」

「さてと…あと一仕事やらないとな。」
　４人を見送った店主がカウンターから立ちあがった時、一陣の風が吹きこんできた。
「どうも、文々。新聞です。」
「天狗の新聞屋さんか。いつもいい暇つぶしにさせてもらってるよ。」
「ご愛読ありがとうございます。さて、今年のハロウィンですが…。」
「僕のところに普通の子供が来るはずないだろう。稗田の家にでも行ったほうが有意義だよ。」
「普通のイベントを追っかけても面白くないですからね。今年は普通でないところにお菓子をもらいにいく４人を見かけたので、それを追っているのです。」
「ああ、あの４人か…ならこんなところにいないほうがいい記事ができるだろう。あれは口に入れた瞬間が最大の衝撃なのだから。」
「ほう？　確か、チョコレートというものを渡されていましたよね？　私も一度食べたことがあります。普通に甘くておいしい部類のものでしたが。」
「普通のチョコならね。だが、今回外から流れてきたチョコは別物だった。これなんだが…」
「…99％？」
「チョコの主原料となるカカオというものの濃度を極めて高くしたものの様なんだ。これがすさまじい苦さでね。おそらく、甘めに作った紅茶や珈琲の受け菓子なのだろうけど…流石に顔が歪んだね。あの４人がこの苦さに耐えきれるとは思えない。」
「なるほど、それでは対象を再び追跡します。取材にご協力いただきありがとうございました。」
「ああ…ところで、いらないかい？　これ。」
「私もあまり苦いのは得意ではないんですよ。」

　一陣の風が去った後、店主は入り口に退魔の御札を貼り付けた。霊夢謹製の、下級妖怪をシャットアウトする御札である。
「下手に逆恨みされても困るからね…一応、念を押しておくにこしたことはない。さて、寝よう」
　ドアから離れる間際、くぐもった悲鳴が聞こえたような気がしたが、店主は気にせず店の奥へとはいって行った。

「チルノー…大丈夫…？」
「……まだ駄目。」
「うう…ペッペッ。苦い…」
「ぐったりだよ～、もう…」
　４人はふらふらと飛びながら神社へと向かっていた。ミスティアの証言もあって、チョコレートなら大丈夫とたかをくくって勢いよく一口食べたのが運のつき、４人そろって生涯最凶の苦みを体験することとなった。いままで集めたお菓子もこれの口直しにすべて使う羽目となり、それでもなお口に残る強烈な苦みは消えずに４人を苦しめていた。チルノにいたっては飛ぶ気力すら失われ、リグルの背中でぐったりしていた。

「トリック・オア・トリート…」
「……わざわざこんなとこまで来た割に、えらく元気ないわね…」
「調子狂うぜ。」
　神社についても、４人の気力は復活することなく、自然お決まりのセリフも覇気がない

ものとなった。来ると思って待ち構えていた霊夢と魔理沙は肩透かしを食らった気分である。

「なんでお菓子をもらう側なのにこんなテンション下がるようなことばっかりになるのよ…。」

「何をもらえばそんなテンション下がった状態になるのかは少し気になるけれど…」

「まぁ安心しろ、少なくとも私たちからのお菓子は期待していいと思うぜ。」

「ほんとに？」

「ああ、なにせ、普通のアメを数倍おいしく食べれる魔法の粉を私が開発したんだからな。」

「……魔理沙の魔法ね…」

「なんだその不安と文句がふんだんに混ざってるセリフと顔は。」

「そりゃ、あんたの魔法じゃあね、聞いただけじゃそう感じるでしょうね。」

「ふふん、最初そう言ってた割に今ではお前もおいしげに食べてるじゃないか。」

「おいしいからね。」

「……え？　霊夢も体験済み？」

「今食べてるのがそれ。アメにつけて食べるだけだから…ほらコレ。アメは私からあげるわ。」

「どれどれ…。」

　４人は投げ渡されたアメに魔理沙の横においてある粉をつけて、おそるおそる口にした。

「……！？　何これ！？」

「口の中ではじけて…！」

「すごいすごい！おいしいよコレ！」

「何々！？　あたいにもちょーだいよ！」

　さっきまでの雰囲気はどこへやら、一斉にいつもの元気をとりもどした４人。やれやれ騒がしくなっちゃった、と肩をすくめる霊夢の隣で魔理沙はにやにやとその様子を眺めていた。

「あ…粉、なくなっちゃった。」

「ああ、これ使え。余らせてもしょうがないからな。」

「わ、まだあったんだ！」

「魔理沙の割にやるじゃない！」

「お前にそんなセリフを言われるとは思ってもなかったぜ。」

　喜々とする４人を眺める魔理沙を見て、霊夢はふと思い当るところがあった。この魔理沙の笑い方はー…

「ねぇ魔理沙？　このお菓子…もとい粉ってどうやって作ったの？」

「作る…というか、香霖堂に流れ着いてたらしいんだ。つい１週間ほど前に買ったんだよ。」

「の、割にずいぶん量があるのね？」

「ああ、あいつらに渡した分は作り足したもんだからな。」

「…細工は？」

「みてりゃわかるぜ。」

　ああやっぱり「そういう」粉だったのかー、と霊夢が思うと同時に、４人に異変が起きていた。

「ーーーーーーーっ！！！！」

　なにやら口にアメをくわえたまま、苦しそうにしだす４人。まさかこいつ毒物でも入れてたんじゃないだろうなと霊夢が勘ぐったその時に、４人はアメをはきだしー

　同時に４人の口から小さな色とりどりの星がすごい勢いで噴き出てきた。まるで、花火のように４人の口からとめどなく流れ星が発射されていく。結果を知らなかった霊夢は驚きで固まり、実験大成功の魔理沙は腹をかかえて爆笑していた。

「すごいですね！　新手の毒物ですか？」

「ん…ああ、あんたか。」

「毒物とは失礼な。新境地のお菓子だぜ」

気づけば鳥居の上からこの地上の流星群を見て、けたけたと笑っている文がいた。

「いや、だってこれ、明らかに痛がってましたよ？　はたから見てる分には面白いんですけど…」

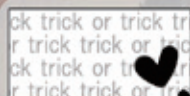
「だから妖怪専用の粉だ。妖怪のような連中相手に、口の中でパチパチはじける程度のものじゃ面白くないと思ってな。この日にむけて突貫でつくりあげたんだ。」

「ーーーーーーっ！！！！」

　文と魔理沙の会話中も身もだえしながら４人は星をはきだし続けている。ときおり、魔

理沙に向けてすさまじいまでの恨みの目線を向けるが、当の本人は全く意に介していない。
「…で？　偶然来たってわけでもないんでしょ？　あんた。」
「ええ。今日はずっとこの4人を追っていたんです。」
「なんでまた？」
「生きている年齢的にはずっと人間よりも大人な妖怪が、子供のようにはしゃいでいる姿を記事にしたかっただけなのですが…、ずっと面白い記事がかけそうですよ。」
「へぇ、どんな？」
「そうですねぇ…」と、いいつつ、文はもはや星も出しつくし、すべてのやる気を失った4人を見てこういった。
『お菓子で悪戯される妖怪』ってとこですかね。」

（終）

〈作者コメント〉
　特集でははじめましてです。全然リグル前面に出てないですね。いいのかこれで。
　B君ハバネロはまだちらほら見かけますけど、99％とかパチパチ飴とか滅多に見かけないですよね。
　今回はそんな話です。

突撃！！隣のハロウィン

言示弄

p59

なんだかメインリグルじゃなくね？　trick de trip　的な感じのを描きたかったのです。
菓子を作る際にいたずら心できのこを混ぜてみたところ、食うと陶酔状態になる菓子ができてしもた。　みたいな。
　感じ。　無理があった。

表紙

小崎

描いてて途中で、「しまった！これBLEACHじゃん！」と気づいたときには卍解してました。

無題

草加あおい

p60～p63

ネタ的に苦しいですね、ごめんなさい。
主役がおぜうさまのようにも見えますが、きっと気のせいです。たぶん。
背景を描くセンスが欲しいDeath…orz

リグルとチルノ神社へ行く

キッカ

p64～p65

なんかよく分からない漫画になってしまいましたが、読んでいただければ幸いです。
霊夢の顔描いてないことに全部描き切ってから気付いた。

and

lube

p66

時間が無いのは言い訳にならない！という事で今回は漫画を描いてみました。
最近はCG作るより漫画描いてる事の方が多いという不思議な状態になってます。

朝刊

秋水

p79

※コメントはありません

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

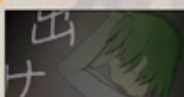
きせかえリグル
てつ

p2

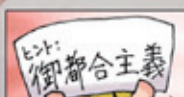
仮装といったら着せ替え……？子供の頃好きだった遊びの一つに紙製の着せ替えがあります。あの頃から二次元（平面）が大好きだったのか自分。PCでの絵作業は便利とは知っていましたが、今回ほどレイヤーの有難みを感じたことはありませんです。

蟲とサディストとチューバッカ
羅外

p17

ハロウィンと言えば、チューバッカというのは、サウスパーク好きな人ならわかってくれるはず

無題
夜行

p6

私達人間は闇に恐怖を抱きますが、闇に生きる妖怪達はどうなのでしょうか。
彼らを包む闇がやさしいものであることを願います。
リグル・リグラー・リグリエーターの方々に愛を込めて

コダワリ思考
涼音　奏

p18～p19

「つよい リグル よわい リグル そんなの ひとの かって
ほんとうに リグルを あいするなら すきな リグルを めでるべき」

--http://rshk.uijin.com/

月遅れ　月送れ　月をくれ
凡用人型兵器

p7～p8

五年ぶりくらいに漫画と呼べるようなものを描いた気がします。それにしても阿求さんはロングヘアーでも可愛いですね。。

ほたりぐる～ハロウィン編～
怒羅悪

p53

「今日はカボチャ食べます？」引き続き投稿のどらおです。この後かぼちゃが落ちて砕け散る等があったりしましたが、間に合いませんでしたwハロウィンと聞いてかぼちゃを連想し、創刊号思い出した人はワタシ以外にいるのでしょうかw？それでは、失礼しました。

酒は飲んでも飲まれるなという御話
Ｓｔｅｐ

p9～p12

はじめまして、今回ついに勢いあまって投稿してしまいました！　よろしければ次もよろしくお願いします

リグると！
ひどぅん

p54

ドロワとかかぼちゃぱんつとか
最初に言い出したのは誰なのかしら
ルーミアが便利キャラになってるような気がしないでもない

幽リグのウワサ
東

p13～p16

今回も時間がなかったのでとあるコピー本に収録した幽リグ漫画をそのまま投稿させてもらいました。まぁ最終的にはリグチルになってますが。チルノの胸がやたらでかいのは気にしないでくださいw

蟲の手帖
HOUSE

p55～p58

仕上げてから気づいてしまったんですが、部屋に蛾の交尾写真をピンナップしていたらちょっとイヤかもしれない。
自サイトにてすっかり書き忘れた蟲の名称や、分かり難い小ネタの解説を公開しています。
web検索【黄色い地球儀】

月刊ナイトバグ　2009年11月号

2009年10月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

「…。」
コクッ…ゴクッ…
「…今月は、ハロウィンだもの。」
カチャリ…

★ 今月のうまかったよスイーツ ★
『大阪名物　くいだおれ太郎プリン』
甘さ控えめなプリンにカラメルソースと焦がし砂糖をかけて頂く、なんやかんやで激甘ウマなグッドプリン。
リグルイクエスト地獄の地下洞窟（略称はチチ洞窟なんていかが？）を抱えて紅楼夢＝大阪に飛んだ凡用人型兵器さんから無事終了のメールが届いたので、挨拶もそこそこに「美味いもん食った？いいなぁ大阪！！」と打って返信したところ、本と一緒に送られてきました。今、机の上には一気食いされた太郎の帽子（6個）が並んでいます。ひゃあ、大阪最高だぁ！

来月はクリスマス特集です。ひと月早いですがデパートなんてそんなもんですよね。年末商戦！年末商戦！

2009 / 10/ 22　小崎

次号12月号は11月22日（日）発行予定！

※次号投稿締切は11月15日(日)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

文々。新聞

2009年（平成21年）11月1日（日曜日）

文々。新聞

発行者　射命丸 文
住所　妖怪の山近辺
電話　088(12a)888

年齢不詳の八百万神を逮捕

博麗神社崩壊

31日未明、博麗神社が崩壊した事件で自警団は無職鍵山雛容疑者（年齢不詳）を家屋損害の疑いで逮捕した。鍵山容疑者は「菓子をくれないと厄をかける」と神社の持ち主である博麗さんを脅し、口論の末犯行に及んだと容疑を認めている。同日は里でハロウィンが今年初めて開催された。関係者はこのような事件が起きるとは。と困惑の様子であった。普段は人間と友好的な厄神様が何故このような犯行に至ったのだろうか。専門家の河城にとり教授は「鍵山容疑者はハロウィンの事を聞き雛荒らしと勘違いをしたのではないか。お菓子を出し渋った神社側にも問題があるのでは」と指摘する。

鍵山雛容疑者

蟲の知らせ 新サービス開始

リグル・ナイトバグさん（蛍の妖怪）による蟲の知らせサービスの改良版が11月から適用される。虫の知らせサービスとは利用者が決めた時間に蟲を大量に這わせてお知らせしてくれるというものだ。朝の目覚ましや、子供の帰宅時間の合図として人気が高かったが、近年利用者が落ち込む一方だった。そこで、災害や事故があったときに決められた相手に自動的に連絡や救助要請を行うというサービスを新たに追加した。

モニターの八雲藍さん（式神）は「子供の登下校も安心して送り出すことができる。子供の現在位置が分かるオプションも魅力的だ」と述べる。

ようやく、蟲の知らせらしい内容になったと前評判は上々であるようだ。蟲の地位の向上に大いに貢献するだろう。

ぐる☆ない
かくえもん

とりー
おあー☆
とりー？

雛荒らし
四国・中国地方で、3月の節句（雛祭）に子どもたちが供え物をもらい歩く行事。雛祭りは問答無用で鍵山さんが主役らしい。

編集後記

珍しく文章を書いてみました。誤字脱字・おかしな表現がどこかにあるんじゃないかな？うん。作成にはフリーソフトの朝刊太郎を使わせていただきました。慣れるとかなり使い勝手がいいです。オススメ！

ええと、後何行ですかね？リグルの仮装はあれです。蛍星石です。庭師の掬鋤（スコップ）とかいって流行ればいいのに。

そろそろ埋まったかな？まだ埋まんないのかよ。こんな所まで読んでくださってありがとうございました！ではでは。

角衛門　秋水

余白があったので並べてみた。

はっぴ、はろうぃん

月刊NIGHTBUG　2009年11月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

東　Jade.
羅外　黒ストスキー
涼音　奏　悠木玲二
小崎　ADDA
mimidori
くうりん
くらげん
やにたま
貴キ
蛍光流動
緑
亞Q
夏樹 真
尾巻ニゲル
西遊
如月翔
社　蛍夜
くろと
壁々
てつ
秋水
夜行
HOUSE
lube
キッカ
ひどぅん
言示弄
草加あおい
怒羅悪
凡用人型兵器
S t e p